

「笹川杯本を味わい日本を知る 作文コンクール 2022」(中国語版)

入賞作品

目 次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022」(日本語訳) 一等賞作品	
マカオ大学 人文学院 中国語言文学 1 年	汪月童 3
暨南大学 文学院 漢語言文学 2 年	譚碧雅 5
雲南大学 文学院 漢語言文学修士 1 年	王一冉 7
武漢大学 弘毅学堂 弘毅学堂 3 年	白礼文 10
雲南大学 文学院 比較文学与世界文学修士 2 年	李関月 13
★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022」(中国語原文) 一等賞作品	
マカオ大学 人文学院 中国語言文学 1 年	汪月童 16
暨南大学 文学院 漢語言文学 2 年	譚碧雅 18
雲南大学 文学院 漢語言文学修士 1 年	王一冉 19
武漢大学 弘毅学堂 弘毅学堂 3 年	白礼文 21
雲南大学 文学院 比較文学与世界文学修士 2 年	李関月 24
★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022」(中国語原文) 二等賞作品	
北京大学 城市与环境学院 第四纪古海洋学博士 4 年	商纪元 26
北京大学 芸術学院 芸術史論博士 1 年	吴宛妮 29
福建師範大学 生命科学学院 生物学 2 年	竜飛越 31
上海交通大学 教育学院 教育学修士 1 年	何明昭 33
中国人民大学 文学院 中国古典文献学博士 2 年	王鑫 34
北京化工大学 日本語語言文化学院、亞非語言文化学院 日本語 2 年	王博灝 36
華東理工大学 外国語学院 日本語 2 年	李可成 38
マカオ大学 人文学院 中国語言文学 1 年	郭菁媛 40
海南大学 外国語学院日本語系 日本語 4 年	王程傑 41
蘇州大学 文学院 漢語言文学修士 2 年	李雪雯 46

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022」

(中国語版)

一等賞作品

(日本語訳)

「天空の城」を築く —アニメから見る環境問題—

澳門大学

人文学院 中国語文学1年

汪月童

初めて「天空の城ラピュタ」に出会ったときは、その音楽にうっとりして、少年の勇気と誠実さに感動しました。「風の吹くところに希望がある」と、宮崎駿先生は少年少女の純粋さを描き、ユートピアを形作りました。子供の頃は、悪役の企みが失敗したことだけで大喜びしていた記憶があります。大人になってから改めて鑑賞すると、また違ったことに心を打たれました。

1986年の作品で、40年近くを経過していますが、栄枯盛衰のめまぐるしいアニメ業界でその地位が揺らぐこともなく、世代を超えた名作となっています。宮崎駿先生の作品に多い評価は、癒やされる、すばらしい、理想主義といったものです。各作品をよく見ると、「風の谷のナウシカ」では少女が郷里の環境の維持を見守っており、「天空の城ラピュタ」では「ラピュタ」と飛行石を創造して、あるいは「千と千尋の神隠し」で不思議な油屋が出てきて……宮崎駿はマジックリアリズムの手法を通じて自然に対する保護を呼びかけ、すばらしい世界、汚れない心に対する希望を生き生きと描きながらも、痕跡を残すことなくアニメを通じて人々に示しているのです。

このアニメはほんの三十数年前のものですが、大自然の悪夢はもう百年も存在しています。人がいるところには汚染が発生する、という問題は、生物学上で永遠に避けられないものです。産業革命の後、人類がエネルギーを際限なく開発したため、地球温暖化、氷河の融解、世界八大公害事件といった環境問題が次々と現れました。自然はそのフィードバックにより人類に警鐘を鳴らしています。低炭素と省エネルギーは、未来の人類世界の重要

な課題になるでしょう。

マジックリアリズムのもとでの「ラピュタ」は、「飛行石」を掌握することで無限の力が手に入り、浮遊する都市をユートピアに作り上げ、自然にも人にも優しい静謐ですばらしい環境を築いていました。こうした世界は作者の心の中の楽園で、完璧なばかりにファンタジーに見え、かえって現実の環境のひどさを引き立てています。スモッグのよどむ空、融解する氷河、連年の高温……マジックリアリズムの筆法を通して、作者は現実を暴露し呼びかけを発しています。

宮崎駿作品の中にこのような体現が見られるだけでなく、別のアニメ巨匠、新海誠の作品「天気の子」でも連年の大雨という自然災害、天気を変える能力を持つ少女が出てきます。映画の中の愛情観を除外すると、同作品もマジックリアリズムで満ちています。少女の神通力はファンタジーで、連年の大雨は現実を誇張した反応です。宮崎作品と似ているところは、主人公がいずれも少年であることです。両者とも、少年の勇敢さと純粋な心を通して、日本社会ひいては全人類に環境の保護を呼びかける描写が、微に入り細をうがっています。

努力するまでもなく、「風の谷のナウシカ」あるいは「天空の城ラピュタ」を観て、自然保護の呼びかけを味わったとき、古の文明を見守ったナウシカからも、最後にラピュタに残って一面の浄土に変えることを選んだシータからも、人類と自然の関係が中国の哲学、老子の「道は自然に法る」、「無為にして治まる」の思想と偶然に一致しているのが伝わって来ることでしょう。日本のアニメが中国の古代哲学の思想と似ていることは、ちょうど中日の文化の交流を実証しているのです。

春秋戦国の百家争鳴するうちから、道家は人と自然の調和がとれている付き合いが人の存在の根本であると悟っています。日本が遣唐使を出し、鑑真が日本へと渡って、さらに中国と日本が世界の大国になっても、古今を通じて、中日両国にはずっと友好的な付き合いが存在しています。数百年の間は両国の間に摩擦や隔たりがあったかもしれませんが、グローバル化の成り行きに従って、中日両国は低炭素、省エネルギー、環境保護といった問題で共鳴しており、同じ心で尽力し続けています。

日本と言えば、島国が環境保護を極度に重視しており、人々の環境保護意識もきわめて高いことに思い当たります。日本のごみ分別の厳格さ指数は世界屈指で、新エネルギー自動車は他国より 10 年ほど早くから全国に普及しており、蛍光塗料を軽減した街灯の発明や使用制度のほか、文学者の使命を自然保護と結びつけた「文学作品のエコバッグ」もあり、東京五輪のオリンピック村ではリサイクル可能な資材が随所に用いられ……一方の中国は経済の急発展と同時に、環境問題も重要な位置に置いています。「金山銀山は緑水青山にしかず」という標語は単なるスローガンではなく、むしろ中国人の郷里に対する態度です。

「一枝だけ咲き誇っても春ではなく、万紫千紅が春に園を満たす」のです。中日両国が低炭素、省エネルギーの面で進んでいても、環境は全世界の問題なので、両国は他国との協力という問題のみならず環境の危機にも直面しています。中日国交正常化 50 年の今年は「バーゼル条約」の履行時期にも当たり、全世界のゼロエミッションを目標に努力して、大国の威厳を打ち立て、全世界と共に進んで、人類の新しい生活を作る時です。貧しい子供がもう劣悪な環境に妥協しないで済むように、水不足の地区が連年の高温で悩まなくなるように、都市の人々もスモッグに空を覆われなくなるように。全世界が手を取ると、コロナ禍での救援物資箱に添えられていた「青山一道なれば雲雨も同にし、名月何ぞ曾て是れ両郷ならん」を思い出さないでしょうか。

作中では、2 人の乗った飛行船が荒れ狂う風と雷雨を経験して、やっと神聖国家の姿を目にしました。現実の中の人類も、順風に帆をあげることはできないでしょう。10 年 20 年あるいは 50 年あるいはもっと長くかかっても、いつかは、青と白の惑星が緑に覆われ、なじみの曲が響いて、映画の中のラピュタ、小説の中の楽園が想像から現実に。物語の最後に、シータとパズーが滅びの呪文を唱える必要がなければ、ラピュタが消え去ることもなく、シータが女神のように美しく優雅に、地球上に本当に存在できるのです。

そのとき私はお茶を入れて、青空の巻雲でも鑑賞しましょう。

注：

- 1、「天空の城ラピュタ」——宮崎駿
- 2、「風の谷のナウシカ」——宮崎駿
- 3、「天気の子」——新海誠

自然との一体化 『美的情素』を読んで

暨南大学
文学院 漢語言文学 2 年
譚碧雅

『美的情素』は日本の著名画家、東山魁夷の散文を集めたもの〔訳注：日本で刊行されている同氏の多くの著作を収録〕で、作者は前半生に遊覧した記憶を率直に述べ、彼の自然観

を詳しく説明し、人生の哲理を思索しています。この本を読むと、碁盤を觀賞するかのよう
に、引き込まれて書中の巧みさを発見することができ、大迷宮の中で絶え間ない謎解きを
味わえることもあります。本書では、日本式の美に対してと、いかに自然と調和して付き合
うかに対して、東山魁夷の悟りが明らかに述べられています。

第一章「日本の美を求めて」では、東山の美学の認知の中には日本の本土に対する心から
の愛が満ちており、彼が理念を伝える根源はそれなのだと気づきます。環境の優美な港町、
神戸で暮らした少年時代から、東京美術学校へと進学するまで、日本に根を下ろした彼は
本能的にこの国の自然美への感知を増やし、悟りを深めています。日本の自然の景色は、彼
が淡路島で夏を過ごしていたとき、海に近づくと、「夜明けの空が水平線の近くで茜色に染
まり」、日暮れの円山公園では「一株のしだれ桜は、淡紅色の華麗な粧いを枝いっぱいに着
て」いるのを見えています。¹ こうしたよく知っているようでよく知らない自然美が彼の最初
の審美眼を培い、彼の芸術の品性を作り上げました。

自然の風景画は東山作品の重要な様式で、彼は鋭く自然の色彩を觀察して、自然と共生
する態度で絵を描き、文を書いています。また日本文化が東山の打ち立てた価値の方向を
指し示していることも軽視できません。東山の筆を通して、日本が自然の法則に順応した
国だと感じ取れます。工業化、都市化が急速に発展した状況でもなお、この国は自然の元来
属する風景を最大限に留めており、これは文明です。東山は日本の古典文化を掘り起こす
ことに熱中して、『万葉集』などの伝統的作品を評価していました。彼の印象の中で大和の
美は比類なく、ここから東山が内心で大和の美への向き合い方を特に誠実に重視していた
と思われまます。

そのほか、西洋での研修と中国で遊覧した経験も重要な作品の源泉となっています。異な
る景色は視野を開きます。ヨーロッパの各国を巡り、西方の新しい思潮を受けてもなお、
質素で揺るぎない態度を守って自分のものを創作したことにせよ、三たび中国を旅した後
で東洋の美を悟って、中日の文化交流の昔を思い起こしたことにせよ、外来の文化に向き
合うとき、東山は尊重し理解しながらも決して受け売りをしない貴い態度を維持していま
す。これは作者が絶えず東西の文化の精華をくみ取ることを促したうえ、その心境の変化、
芸術作品にも多くの新しい認知と新しい構想を提供しました。本の中で彼は、静寂なサン・
マルコス修道院を訪問し、フラ・アンジェリコの謙虚で礼儀正しさに満ちた質朴な壁画を
見て、自分の世界を重視し、掘り起こして画家の価値にするべきだと悟ったと述べていま
す。また、南京、揚州の多くの地を見学したとき、中国の水墨画が最高峰に達するまでの容
易ならざる道のりを感じ、水墨画の精神性に対して深く関心を持ったとも言及しています。
この東西での経験いずれもが東山に文化交流のもたらす影響を気づかせたのです。

文化資源も自然環境資源も有限です。東山が書中で選択したのは、自然資源の貴重さを文
字と絵画を通じて伝え、文化資源を創造して、人々が日本式の美、自然美を発見するよう
促し、人々が自然と保護意識を強めて、別の意味での「グリーンエネルギーの高度利用」へと
つなげることでした。

東山の記す散文に反映されている上品さは、彼が飾り気のない言葉や絵画を通じて現象を述べ、観点を説明できるということでしょう。中日翻訳の壁をよそに、彼は一言一句の中でしなやかにそうしたものを伝えられるのです。たとえば鑑真和上の心象風景に言及したとき、話の結びで「和上にひとめ日本の風景をごらんいただけたら、ほんとうによかったのに」と述べています。そして「和上のみたまにささげよう」の講演時、彼が描いた障壁画「山雲濤声」は、色調の大部分が薄い灰色、青紫色であることも、典型的な山と海で鑑真に対する敬意を表現しようと決意したことも、彼の作風のもとではあっさりとは表現されており、工夫を凝らして構想であり、根気よく理解した後の成果でもあります。全身全霊を自然の中に投じて、すべての景色の声を聴き、自然美への愛を紙の上に浮かび上がらせるのです。

ほかにも彼が自然と調和した付き合いの中で純粋な一体化した状態に達しているのはどうして分かるのでしょうか。東山と大和の美の密なつながりに体現されているのは、主に奈良公園で垣間見られる生命力に満ちあふれた野山、心を悦ばす人文と美しい景色の引き立て合う調和です。また三輪山では日本的な美の原形を感じ取り、大自然の変化「春の芽ばえ、夏の茂り、秋のよそおい、冬の清浄」²を見て取っています。自然から自己へ近づく中で、自然の軌跡が人と密接な関係にあり、真実に満ちていることに気づくと同時に、自身の内部は矛盾が存在するもので、静寂の中で限りなく思索して自己を発見し、調和する状態に達して、無我の境地へと昇華する必要があります。ゆえにその根源を突き詰めると、東山が「美しさの本意」を上品に深く理解できるのは、彼自身が自然美を十分に認め尊重していることに重点があります。彼は自然を愛し、またその愛の中に浸っているのです。

現実生活の中に戻ると、低炭素とグリーンエネルギーは持続可能な発展に不可欠のキーワードですが、『美的情素』が教えてくれるのは、まず自然美を心から愛さなければ、真の意味で低炭素やグリーンエネルギー利用といった制度に従うことができないということです。思想的な共鳴に至れなければ、真の意味での実践は困難です。日本で、中国でだけでなく、全世界で共通の美を抱擁して見守り、自然と一体化するべきなのです。

¹この2か所の描写は東山魁夷(著)唐月梅(訳)、『美的情素』、復旦大学出版社、2008年1月、p12、p15より。

²東山魁夷(著)唐月梅(訳)、『美的情素』、復旦大学出版社、2008年1月、p58-59。より。

低炭素社会の発展の啓発 —日本の伝統的自然観の現代における意義—

雲南大学
文学院 漢語言文学修士1年
王一冉

「低炭素社会」という観点は最初に日本の学者が打ち出したもので、日に日に世界中で広く関心を受けるようになってきました。今や「低炭素社会」は確かに再考の視角を提供しており、機械論的自然観のもとで人類が次第に自然から離れていき、自然に対する略奪が環境と人の心に対して二重の衝撃をもたらした経緯について気づく契機となっています。

人類と自然はひとつの世界に属しています。自然の占有と破壊が人々の膨張する欲求の現れだと言うならば、人々の心深くの困惑と脆さ、人々の閉鎖的な個人主義も、人々が自然の占有に囚われた原因かもしれません。たとえ当今の物質的文明の極度で発達している時代の中で、自然がますます客体の地位に置かれ人類と分かれつつあっても、自然の問題と人の心の問題の解決が同時進行できると考えてみることはできます。しかも人と自然との関係、「低炭素社会」の発展を考える過程で、学者らは現代の環境における東洋の伝統的自然観の重要な意味に気づきつつあります。彼らはそうした東洋の思考法を「自己組織化した宇宙観」と呼び、その宇宙観の中では人と自然はもう機械的に対立することなく、融合して共生しているというのです。そこでは、自然はその本来の姿を維持して、人と自然が溶け合うとき心の豊さが得られるといった雰囲気醸成が醸成されています。こうした雰囲気や世界観はいずれも日本の伝統的自然観念の中で裏付けを得られるものです。

日本の伝統的思想の中で、自然が重要な地位を占めていることに疑いはありません。大西克禮が「あはれについて」で述べているとおり、「民族の生活や文化が一種独自の仕方について、自然に即し、自然に順応し」ているのです。太古から中世、そして近世、近代に至るまで、自然感の要素はずっと日本民族の思考モデルの中に存在しています。もっと重要なのは、この過程の中で、自然についての敏感な観察、包容や共感が、すでにある種の重要な人格の要素になって確立されていることです。自然の中の個人として、彼らは最も明らかな四季の変化を感じることができ、誠実できめ細かい心を維持すると同時に、千変万化する万物の中に魂を通い合わせることができます。彼らは自然を詳細に観察し、また自然へと流れ込むことによって「物我同一」の境地に達するのです。しかも現代の視点から見ると、こうした人格要素の確立は非常に貴いものだと気づきます。当今の社会環境の発展と向き合うとき、トップダウンの強硬な措置は効果が微々たるもので、一人一人が自然と内心から発する尊重、許容のほうの方がより根本的な要素かもしれないからです。日本では、伝統の文化、芸術など多くの面にこのような要素が浸透しています。

まず、日本の伝統的自然観は和歌の中に見られます。「歌は人にとって不可欠なもので、歌の中で、人の心や世事と自然がともに表現されています。しかも日本の歌人にとって、自然と向き合う者の人格や精神などの要素は自然と融合したものです。人には自然の四季

の移ろいが敏感で多情だと気づく感覚があり、人類の存在と自然の存在は不可分で互いに平等です。ちょうど『古今和歌集』に見られるように、四季の自然の中の様々な風物が誠実に描写され、本来の状態をとどめていると同時に、人の精神が深まる段階も自然の景色と共に表現されています。「春は鶯が花の中で囀り、秋は蝉が樹上で鳴き、特に意図はないものの、それぞれが歌を発している。物には皆そうしたものがあ、それは自然の理である。」自然は人と同様に感動を呼び起こす生命力を持っています。機械的な、硬直したものではなく、人類と同じように感嘆を歌に詠み、生命の活気を振りまいているのです。和歌などから伝わる自然の感慨の中で、人々は自然による喜びを感じ、自然に近づく自由を感じて、自然を慈しみその完璧さを感じるため、そうしてものを内心から発するのです。ここから推測できるのは、こうした自然観のもとで、人々が環境中の万物に配慮することは、内心に順応しており少しも抵抗がなく、自然を愛することは自分を大切にするようなものだという事です。こうした観念のもとで、意識的に寛容で利他的な発展モデルを築くことには支障がありません。

また、日本の伝統的な自然観は俳諧という芸術に織り込まれて深められてもいます。「天地を尊重して、万物、山川、草木と人倫の本意を忘却せず、落ちた花、散った葉の間で遊び戯れて、その過程で古今の道を貫く。」自然と俳諧の主意は密接な関係にあり、その基礎の上で、自然に対する尊重がさらに深まっています。中世以前の自然に対する態度が多くの主観的な要素を含むと言うならば、俳諧の中の自然はより純粋なものです。人々は真に自然の諦観に耽溺し、自身を十分に自然の中へ浸して、狭い自己の枠の中から飛び出して、自然な万物のリズムを体得しようとするのです。「像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ふ。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化ひかへれとなり」。日本の俳人は自然との深い同化に至っています。松尾芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」、
「雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨」、小林一茶の「初雪は竹にふる也瘦竈」、「悠然として山を見る蛙かな」、与謝蕪村の「さくら狩り美人の腹や減却す」、「春雨の中を流るる大河かな」などの中からは、きわめて清浄な自然のリズムを感じることができ、深く心を動かされるのです。俳諧の中で、自然は様々に変化していますが、それはその活力あふれた生命の十分な体現であり、客観的に自然から学ぶという態度さえ俳諧では絶えず強調されています。自然に対する畏敬は、自然についての心からの理解を基礎に成り立ってこそ、このように、人と自然が溶け合う境地へ徐々に向かっていけるのです。

「低炭素社会」の発展を追求するため、日本の伝統的自然観から啓発がもらえるかもしれません。それは東洋の思想の中の貴重な財産です。おぼろげで深遠な和歌から風雅の心である俳諧まで、いずれも自然と一体化する人格の特質、人類が自然と共有する生命力を体現

しています。日本の伝統的自然観は「自己の欲求という狭い空間の中から出て行って、より広大な天地を尊重し受け入れる」きっかけをくれます。また、そうすることで、現在きわめて緊迫している環境問題に重要な解決の道を提供できるかもしれません。

[1] 大西克禮. 日本美学三部曲(原著は『幽玄とあはれ』)[M]. 北京:北京理工大学出版社, 2020.

[2] 紀貫之. 古今和歌集 300[M]. 北京:北京聯合出版公司, 2020:10.

[3] 今道友信. 東方的美学(原著は『東洋の美学』)[M]. 北京:三聯書店, 1991.

永井荷風『日和下駄』中の環境美学思想についての簡単な分析

武漢大学

弘毅学堂 弘毅学堂3年

白礼文

21世紀の今日、生態系の問題はますます各分野の研究者から関心が集まっています。文学の領域では、エコクリティシズムが新しい文学批評の流派として文学作品の分析に用いられ、伝統的な文学批評に新しい視角を提供しています。日本の文学者、永井荷風は自然描写に長じていますが、長らくその散文作品の研究では耽美主義作家であることに焦点が当てられ、作品中の審美の風格と特質についての分析が多く¹、その作品に含まれる生態の思想に関心を持つ分析はほとんど見られません。本文ではエコクリティシズム理論と結びつけて、永井荷風の随筆集『日和下駄』中の環境美学の観念について簡潔な分析を試みます。『日和下駄 一名 東京散策記』は、永井荷風が東京の路地を散歩しての見聞や所感を記録したものです。本の中で、荷風は伝統的な低炭素の交通手段についての好感と尊重を表現しています。明治時代にはすでに電車がとても発達していたものの、荷風は依然として徒歩という最も古くて原始的な交通手段を愛用しており、『日和下駄』には歩くことに対する感情が託され「日和下駄の効能といわば何ぞそれ不意の雨のみに限らんや。天気つづきの冬の日といえども山の手一面赤土を捏返す霜解も何のその。アスファルト敷きつめた銀座日本橋の大通、やたらに溝の水を撒きちらす泥濘とて一向驚くには及ぶまい²」とあります。

荷風が歩くのを好むのは、電車、汽車などの近代化した交通機関と比べ、古くからのこ

の交通手段のほうが自然を味わいやすく、道中で自然な美を発見して観賞できるからです。このことは環境美学の観念と偶然にも一致しています。中国の生態批評研究学者、王諾が生態批評の美学の原則を3つ挙げていますが、その中に「溶け合いの原則」があります。「生態の審美は高みに立って遠くから見回すのではなく、身心を自然に投じること」³です。閉鎖的な現代の交通機関は人と自然の間に隔たりを造っているため、徒歩でなければ荷風は妨げるものなく自然の中へ身を投じ、自然の美との出会いに喜ぶことはできないのです。荷風は本の中で、自分と友人が長距離を歩いて東京市内の古跡「有馬の猫塚」を訪ねた経験を記録しています。猫塚は想像していたほど大きくなかったものの、2人は隠された空き地の美しさに気づき、「私は実際今日の東京市中にかくも幽邃なる森林が残されていようとは夢にも思い及ばなかった。……樹木はいずれもその枝の撓むほど、重々しく青葉に蔽われている上に、気味の悪い名の知れぬ寄生木が大樹の瘤や幹の股から髪の毛のような長い葉を垂らしていた。……私たち二人は雑草の露に袴の裾を潤しながら、この森蔭の小暗い片隅から青葉の枝と幹との間を透かして、彼方遥かに広々した閑地の周囲の処々に残っている練堀の崩れに、夏の日光の殊更明る照渡っているのを打眺め、……」⁴たとえ衣服や持ち物に土や露が染みついて、荷風と友人は森の中を通ることを選んで、身心を自然に投じて感じ取っていたのです。こうした自然とのとても親密な交流は、現代人と自然の疎遠さとははっきり異なっており、環境美学の溶け合いの原則の体現です。

伝統的な低炭素の交通手段を尊ぶと同時に、永井荷風はスピードと手軽さを追求した新型の交通機関に対して深い懸念を抱いており、ひねもす利益を追いかけている現代人を見下げ愚弄する態度をとっていました。彼は本の中で「市中の電車に乗って行先を急ごうというには乗換場を過ぎる度ごとに見得も体裁もかまわず人を突き退け我武者羅に飛乗る蛮勇がなくてはならぬ」⁵と書いています。我武者羅という貶しから、現代人が便利さを追求するあまり自然を鑑賞する心をなくしたことの対する荷風の感慨が分かります。荷風の感慨は、彼の生態学的全体論の審美思想を体現しています。生態を研究する学者は、生態審美は生態全体主義とするべきであり、伝統的な人間中心主義を基本思想としない、生態世界観で道具的理性の世界観を置き換えたものと捉えています。⁶そのため、環境美学の審美基準は必然的に、人を中心として人の利益を尺度とするそれまでの美学とははっきり異なります。⁷荷風が尊ぶ昔ながらの交通手段はスピードを求めず、時間を争わずに、道中で利益を考えるとなく自然の景色を鑑賞します。反対に工業文明が発達してから大量に出現した新型の交通手段を見ると、たとえば電車、鉄道などは徒歩よりずっと速く手軽です。その目的がスピードと効果の追求なので、人々は道中の時間を省きに省いて、会社や工場へと急ぎ、経済利益の生産活動に身を投じます。明治時代、日本の資本主義経済が盛んに発展

して、人々は道具的理性の支配するもとで、ひねもす忙しく物質と金銭を求め、伝統的な東洋の美学にある人と自然の調和した付き合いの詩の境地を捨てました。永井荷風は生態全体主義の視角に立ってこの現象に悲哀を感じ、同じ道理で「およそ近世人の喜び迎えて『便利』と呼ぶものほど意味なきものはない」⁸という感想を記しています。

新しい交通手段に対する批判のほか、荷風はまた工業文明が大量のエネルギーを消費し生態環境を破壊することに対する心配と不満も述べています。「今や工場の煤烟と電車の響とに日本晴の空にも鳶ヒョロヒョロの声稀に」⁹、「深川小名木川から猿江あたりの工場町は、工場の建築と無数の煙筒から吐く煤烟と絶間なき機械の震動とによりて、やや西洋風なる余裕なき悲惨なる光景を呈し来った」¹⁰。上述の批判はいずれも環境美学の「否定的な価値づけ」を明らかに示しています。荷風は本の中で自然生態への賛美と称賛を表現するだけではなく、むしろ工業文明による生態環境の破壊に対する批判と否定を多く述べていますが、それはつまり環境美学者バーリアントの言う「環境を犯し傷つけることの批判」¹¹であり、環境美学の中でとりわけ重要です。

上で述べた『日和下駄』の簡潔な分析を通して、永井荷風が長期にわたり関心を集める耽美派の作家、文明批評家であるのみならず、環境審美の目を持った作家で、その作品にも環境美学の研究価値があることが分かります。前世紀の日本で生活していた荷風が本の中で表現した、炭素排出量の多い現代人の交通手段、極端なエネルギー開発と生態環境の破壊への憂慮は、今日の東アジアひいては世界で、無数の人が共に関心を寄せる問題になっています。環境審美の目で、生態批評の視角に立って古典作家の文学作品を見ると、文学と生態保護の領域に新しい啓発を提供できるかもしれません。

¹張煥香：21世紀以来中国对永井荷風文学的研究綜述[J]，名作欣賞，2019年第6期，54-56ページ

²永井荷風(著)陳徳文(訳)、晴日木履，広州：花城出版社，2018年版，4ページ

³王諾：生態批評的美学原則[J]，南京師範大学文学院学報，2010年第2期，18-25ページ

⁴永井荷風(著)陳徳文(訳)、晴日木履，広州：花城出版社，2018年版，57-58ページ

⁵張煥香：21世紀以来中国对永井荷風文学的研究綜述[J]，名作欣賞，2019年第6期，9ページ

⁶王諾：生態批評的美学原則[J]，南京師範大学文学院学報，2010年第2期，18-25ページから転載

⁷王諾：生態批評的美学原則[J]，南京師範大学文学院学報，2010年第2期，18-25ページ

⁸永井荷風(著)陳徳文(訳)、晴日木履，広州：花城出版社，2018年版，30ページ

⁹永井荷風(著)陳徳文(訳)、晴日木履，広州：花城出版社，2018年版，16ページ

¹⁰永井荷風(著)陳徳文(訳)、晴日木履，広州：花城出版社，2018年版，28-29ページ

¹¹王諾：生態批評的美学原則[J]，南京師範大学文学院学報，2010年第2期，18-25ページから転載

参考文献

[1]永井荷風(著)，陳徳文(訳)．晴日木履[M]．広州：花城出版社，2018．

- [2] 蔡珊珊. 從《斷腸亭記》看永井荷風散文的美學品格[J]. 孝感學院學報, 2010, 30(01): 59-63.
- [3] 王諾. 生態美學: 發展、觀念與對象——國外生態美學研究評述[J]. 長江學術, 2007(02): 75-78.
- [4] 王諾. 生態批評的美學原則[J]. 南京師範大學文學院學報, 2010(02): 18-25.
- [4] 王諾. 生態批評的美學原則[J]. 南京師範大學文學院學報, 2010(02): 18-25.
- [6] 王諾. 生態批評: 發展與淵源[J]. 文藝研究, 2002(03): 48-55.
- [7] 王園利. 永井荷風作品的自然審美研究[D]. 陝西師範大學, 2017.
- [8] 曾繁仁. 生態存在論美學論稿[M]. 長春: 吉林人民出版社, 2003.
- [9] 張煥香. 21世紀以來中國對永井荷風文學的研究綜述[J]. 名作欣賞, 2019(06): 54-56.
- [10] Berleant, Arnold. The Aesthetics of Environment[M]. Philadelphia: Temple University Press, 1992.

偉大でちっぽけな変奏曲、人類と自然のゲーム —日本のSF小説集『赤い雨』を読んで—

雲南大学

文學院 比較文学与世界文学修士2年

李関月

日本の推理小説の「鬼才」と呼ばれる貴志祐介は、『黒い家』でのホラーの作風が中日韓で人気を博し、代表作『新世界より』で第29回日本SF大賞を受賞後、引き続き現代社会の問題と人間性の選択を中心に据え、2015年初めからディストピアを題材とした小説集『罪人の選択』の連載を始めました。この小説集は今年出版されると、その深い寓意と人と自然などの問題の多重の探求に対して国内外の巨大な反響を引き起こしました。

制御不能な「杖」と万物の制約を受ける「霊長」

人類は原始の焼き畑農業から繁殖を始め、17、18世紀の啓蒙主義、理性主義の思潮に伴って、近代科学技術が急速に発展しました。19世紀になると、人類は手にした「杖」——石油を利用して、着々と地球の至る所で現代都市を作りだし、神に取って代わって新世界の神になりました。

しかし、この「杖」は万能ではありません。小説の中で、石油枯渇の問題を解決するため、

人類は愚かにも遺伝子研究を通じて光合成を極限まで高めたバイオグリーンエネルギー藻類を創造し、人類のために「美しい新世界」に通じる門を開けようとたくらみますが、創造されたのはフランケンシュタインの「チミドロ」でした。この藻類はすべての生物の細胞に侵入することができ、その登場に伴って地球中に赤い雨が降りました。チミドロ単体ではそれほど毒性がないものの、赤い雨の存在により、世界を制覇できてしまうのです。この小説は一方で井伏鱒二の『黒い雨』から靈感をくみ取っているかもしれませんが、原子爆弾が広島で爆発した後の現地の廃墟は人体に対して致命的な放射能を持っていましたが、爆発時のキノコ雲の粒子がはるか遠方で降らせる黒い雨にも致死性があるとは誰にも思いつかないものでした。他方では歴史上の事実、2001年7月25日、インドのケーララ州南部で赤い雨が2か月降り続け50トンもの孢子がばらまかれた事件についての考えです。15年後に科学者が示した最も可能性が高い真相は、はるか6000キロ以上も離れたオーストリアの藻類の孢子が大気の環流に伴って発生した降雨で同地に舞い落ちたというものでした。

シェイクスピアに「人は世界の精華、万物の霊長」という言葉があります。しかし多くの人には「霊長」ばかりを目にして、その前にある「万物」を見落としています。人は造物主ではなく、万物の一つであり、海洋を含めたすべての生態系の一員でもあります。赤い雨の危機は、生態系における生物と環境の相互の作用と影響のきわめて良い実例です。地球の生態系は統一的な存在で、小さな動きが全体に波及します。人類の自然に対する何らかの変化と関与は、バタフライ効果のように未来に深遠な影響と後の結果を招くでしょう。小説「赤い雨」の中では、小さな人工編集された細胞が生態系内のすべての生物に壊滅的な災難をもたらしました。現実の生活の中で、人類は石油の力を頼みにして新しい神になりましたが、石油の燃焼時に放出される二酸化炭素が全世界の気候温暖化の元凶となり、生態系の破壊、生物多様性の喪失といった深刻な事態を招いています。

人類の目覚め、「ドーム」と「スラム」の対立と協力

後悔につける薬はこの世にありません。人類の科学技術では、時空を超えて以前に行ったことを変化させるには遠く及ばず、過去の事件は未来の発展を打ち立てる不可逆な事実になっています。すでに生じた多くの問題や事態に直面し、いかに失敗を補うのが最も確実かつ実現可能な措置と方法です。それには一人一人の努力が必要です。「ドーム」は人類の能力の到達した極限で、赤い雨に蹂躪されている混沌とした世界と隔離された「楽園」でもあります。「スラム」には現実レベルでの貧困のほか、「棄民」の意味もあります。かつて先進国は汚染源を発展途上国に移転し、その環境を代価にして自身の発展を得ました。これはまさに「スラム」世界に対して「ドーム」世界の行ったことではないでしょうか。しかし汚染の移転は決して問題を根本的に解決する方法ではありません。「ドーム」の赤い雨に対する無条件な排除も、短期的な効果しかありませんでした。本当の救いの道は合議して協力することにあるのです。

「赤い雨」のヒロイン瑞樹はスラム生まれで、私利に走った彼女はあばら屋の父を捨て、科

学技術の発達したドームで研究を行うようになります。2つの身分を持つ彼女は、赤い雨を無条件に排除する「ドーム」が赤い雨の天敵を見つけ出すことは不可能だと気づきます。十分な実験素材と研究事例はスラムにしかなかったからです。それらの実験素材は人類に善悪の分別をつけた「知恵の実」のようなもので、赤い雨と対抗する鍵は彼女を見つけ出すのを待っていました。そこで彼女は自らその「蛇」となります。神聖な空間は俗世間の空間に突入することができ、人類はそこを出発点として混沌の中から世界を創造しました。同様に、俗世間の空間（赤い雨の世界）の侵入も神聖な空間を「幻滅」させます。彼女が「スラム」の赤い雨を持ち込んだ瞬間、「ドーム」の築いてきた「楽園」が解体され、別の面を向きました。それと同時に、タブーを犯した瑞樹は追い出されてしまいます。瑞樹の科学技術の発達したドームでの研究は終わりましたが、真に有効な研究はこの時に幕を開けたのです。

希望の種「いつか、この雨が透明に変わる日が来る」

人類は偉大で、人類はすでに自然を「征服」しているかのようなものです。しかし人類はちっぽけでもあり、このようにいわゆる「征服」は、地球の生態の進化システムの中では大海の一粟のような存在に過ぎません。しかもその過程で発生した危機は人類の解決を早急に要しています。目下、人類はベストを尽くして地球温暖化のスピードを遅らせ、この傾向が広がることを阻止するべく努めることしかできません。「赤い雨」の研究者は、自然の進化でチミドロの天敵が現れることに望みを託します。人類、私たちが来し方行く末の知れないこの世界を徹底的に変えることはできませんが、小説では全人類の未来に希望の種をまいています。

世界がどのように変化するかに関わらず、なお人類に対する信念を維持するのです。フランスの思想家パスカルが『パンセ』の中で述べているとおり、葦のように人間はひ弱なもの、思考を行うがゆえに命をかける自然よりも気高く偉大なのです。そして小説の最後にも「いつか、この雨が透明に変わる日が来る」という期待が残されています。読者である自分も、今から、人類の抗争と思考、少しずつの行為が、最終的にはきっと未来の希望を点せると信じています。たとえ希望がちっぽけで、平原上の小さな火のようであっても、黎明の直前に射す一筋の微かな光のように。

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2021」

(中国語版)

一等賞作品

(中国語原文)

建一座“天空之城” ——从动画中看环境问题

澳門大學
人文學院 中国語言文學 1 年
汪月童

初遇《天空之城》，沉醉于她美妙的音乐，为少年的无畏和真挚所感动。“风吹过的方向，是希望”，宫崎骏先生刻画出少年少女的单纯美好，塑造了一座世外桃源。孩童时的我，只记得坐在屏幕面前为反派的失败而兴高采烈。成人后再次观看，又有着不一样的触动。

创作于 1986 年，历经近四十载，这部作品始终在动画这个迭代更新迅速的行业中屹立不倒，成为一代代人心目中的经典。宫崎骏先生的作品最多的评价，是治愈，是美好，是理想主义。细看每一部作品，从《风之谷》中女孩对家园环境的坚持守护，再到《天空之城》中创造出“拉普达”、飞行石，又或者是《千与千寻》中神秘的油屋……宫崎骏通过魔幻现实主义的手法，将对自然保护的呼吁，对美好世界美好心灵的希望生动但又不留痕迹的通过一帧帧动画向人们展现着。

动画只有三十几的年龄，而大自然的梦魇已存在上百年。有人的地方，就会产生污染，这是生物学上永远不可避免的问题。工业革命后，人类对能源无尽的开发，全球变暖，冰川融化，全球八大公害事件等等环境问题层出不穷。自然用她的反馈为人类敲响警钟，低碳与节能，将是未来人类世界的重要课题。

魔幻现实主义下的“拉普达”，掌握着“飞行石”，她们拥有着无穷的力量，将浮动城市打造成世外桃源，她绿色怡人，静谧美好。这样的世界，是作者心中的伊甸园，她因完美而显得魔幻，而正是这种魔幻也映衬出现实中的环境恶劣。阴霾的天，融化的冰川，连年的高温……通过魔幻现实主义的笔法，作者发出对现实的揭露与呼吁。

不仅仅是宫崎骏的作品中有这样的体现，另一动画大师新海诚的作品《天气之子》，连年大雨的自然灾害，少女拥有改变天气的能力。抛开电影中的爱情观，其中也充满了魔幻现

实主义。少女的法力是魔幻的，连年的大雨是现实的夸张反应。与宫崎骏的作品相似的是，主人公都是少年，两位作者通过少年的勇敢，美好的心灵，将对日本社会乃至全人类保护环境的呼吁刻画的淋漓尽致。

无需刻意，当你观看《风之谷》或《天空之城》的时候，当你领略作者对于自然保护的呼吁之时，你会发现，无论是娜乌西卡对古文明的守护还是希达最后选择留拉普达成为一片净土，它们传达出来的人类与自然的关系都与中国哲学老子的“道法自然”“无为而治”思想不谋而合。日本的动画和中国古代的哲学思想的相似，恰恰印证着中日文化的交流。

自春秋战国百家争鸣中，道家人就已经领悟到人与自然和谐相处是人存在的根本。日本派遣唐使，鉴真东渡去往日本，再到如今中国和日本成为世界大国，古往今来，中日两国一直存在友好的交往。或许几百年间两国间有过摩擦和隔阂，随全球化的趋势，中日两国在低碳节能，保护环境问题上始终有共鸣，始终同心尽力。

提到日本，想到岛国对环境保护的极度重视以及极高的群众环保意识。日本的垃圾分类严格指数可排世界一二，新能源汽车较其他国家近早十年就已在全国推广，创造发明荧光油漆减少路灯使用等等制度以及技术之外，推出“文学塑料袋”，将文学家的使命与自然保护相结合，东京奥运村中处处使用可回首材料……中国在经济飞速发展的同时，也将环境问题放在重要位置。标语“金山银山不如绿水青山”，它不仅仅是一种口号，更是中国人民对待家园的态度。

“一枝独秀不是春，万紫千红春满园”，中日两国在低碳节能方面发展迅速，但环境是全球问题，中日两大国不仅面临着与其他国家配合问题，同时也面临着环境危机。中日邦交正常化五十年之际，《巴塞尔公约》履行时期，将全球零排放作为目标，付诸努力，树大国之威严，携全球以共进，创人类之新生。贫苦的孩子不再为黑暗而妥协，缺水的地区不再为连年高温而发愁，城市的人们也不再被阴霾笼罩。当全球都携起手来，是否想起疫情危难之时中国物资箱上的一句“青山一道同风雨，明月何曾是两乡”。

电影中，两个少年乘坐飞船经历狂风与雷暴，才得以见到神圣国度的面貌。现实中的人类，在这条道路上必定不会一帆风顺。十年二十年或五十年或者更久，无论多久，总有一天，蓝白星球绿茵遍布，熟悉的曲声响起，电影中的拉普达，书中的伊甸园又怎会只停留在想象中？在故事的结尾，希达和巴鲁不必念响毁灭咒语，拉普达将不会消失殆尽，她将以女神般的姿态真正存在于地球，美丽而优雅。

那时候，我只想沏一壶茶，赏天边云卷云舒。

附注：

- 1、《天空之城》—宫崎骏
- 2、《风之谷》—宫崎骏
- 3、《天气之子》—新海诚

与自然合一

——读《美的情愫》

暨南大学

文学院 漢語言文学 2 年

譚碧雅

《美的情愫》是一部由日本著名画家东山魁夷写的散文集，作者在书中倾诉了对前半生游历的回忆，极大地阐释他的自然观，思索人生哲理。读这本书如同观赏一个棋盘，能被它牵引着发现当中的巧妙，也可能在陷入迷阵中不断解惑。在本书中清晰可见东山魁夷对日式美的感悟乃至对如何与自然和谐相处的感悟。

从书中第一章《探索日本的美》便发现东山的美学认知中饱含对日本本土的热爱，这是他传递理念的根源。从少年时代居住在环境优美的港口城市—神户，到进入东京美术学校求学，扎根在日本的他本能地对这个国度的自然美感知更多，领悟更甚。日本的自然风景是他在淡路岛度过夏天时接近海，看见拂晓时天空在地平线近处染成暗红色，又或是日暮时分在圆山公园看见一株垂樱满枝披上淡红色的妆扮。这些熟悉又陌生的自然美培育他初始的审美，成就他的艺术品性。

自然风景画是东山创作的重要体裁，他敏锐地观察自然的色彩，抱着与自然共生的态度去写生、写文。此外也不可忽视日本文化对东山建构起的价值指向。透过东山的笔，我能感受到日本是一个顺应自然规律的国家，即使在工业化城市化快速发展的情况下，这个国度仍最大限度地保留自然本属的风光，这是文明的。而东山热衷挖掘日本古典文化，品鉴《万叶集》等传统著作，在他印象中大和之美无与伦比，由此东山内心对待大和之美也尤其真挚而珍视。

除此之外，东山在西方进修与在中国游览的经历亦是重要的创作源泉。不同的风景打开眼界，无论是在巡游欧洲各国、接受西方新思潮，却仍坚守朴实而坚定的态度去创作自己的东西，还是在三游中国后领悟东方之美，勾忆起中日文化交流的往昔，在对待外来文化时，东山始终保持一种可贵的尊重理解但绝不人云亦云的态度，这既促进作者不断汲取东西方文化的精华，也为其心境变化、艺术创作都提供不少新认知和新思路。以书中提及他拜访幽静的圣马科斯修道院和看见安吉利科这些充满谦恭而质朴的壁画，领悟出应该珍视自己的世界，挖掘作为画家的价值；乃至在参观南京、扬州多地时感受到中国水墨画由产生到登峰造极的不易旅程，对水墨画的精神性给予深切关心此二况都能察觉文化交流对东山带来的影响。

文化资源乃至自然绿色资源都是有限的，东山在书中的选择是将自然资源的珍贵通过文字与画像传达出来，创造文化资源，催动人们发现日式美、发现自然美，在无形中增强人民保护意识，续而达到另一种意义上的“高效利用绿色能源”。

东山笔下的散文反映的淡雅是他总能通过朴实素净的语言或绘画去描述现象、解释观点，抛开中日翻译的壁垒，他能于丝丝扣扣中用文字的力量柔入心房。如在讲述鉴真和尚心中的风

景时，于结尾处写“多么希望鉴真能看到日本的风景啊，哪怕是一眼。”和在阐发“献给鉴真和尚的灵魂”时，他作隔扇画《山云》、《涛声》，无论是色调上大多是淡灰、青紫，还是决意以典型的山与海表达对鉴真和尚的敬意，这都是在东山笔下对淡雅的倾泻，是刻意构思，也是耐心领会后的成果。当全身心投入到自然中，一切景语皆情语，他对自然美的爱浮跃纸上。

此外他在于自然的和谐相处中达到纯正的浑融一体的状态，何以见得？主要体现在东山与大和之美紧密的联系上，是于奈良公园窥见充满盎然生机的山野，心悦人文与美景相映的协调；也是察觉到三轮山里有日本的美的原形，观察到大自然的变化，“春天萌芽，夏天繁茂，秋天妖娆，冬天清静”²。由自然到本我，在贴近中察觉到自然的轨迹与人息息相关，充满真实，同时自身内部是存在矛盾的，需要在幽静中无尽的思索，发现本我，达到协调的状态，从而上升到无我之境。所以究其根源，东山能够对“美的情愫”产生淡雅幽玄的理解重点在于他自身对自然美有充分的尊重与认知，他爱自然，也沉浸在这份爱中。

回归到现实生活中，低碳与绿色能源是可持续发展必不可少的关键词，《美的情愫》告知我需要先热爱这份自然美，才能真正做到遵循低碳与利用绿色能源这些规矩，不抵达思想上的共鸣，是很难能真正落到实践的，我们都应该去拥抱守护这份不止在日本，在中国，更是在全世界都共通的美，与自然合一。

¹ 此二处描写出自（日）东山魁夷著，唐月梅译《美的情愫》，复旦大学出版社，2008年1月，p12、p15。

² 出自（日）东山魁夷著，唐月梅译《美的情愫》，复旦大学出版社，2008年1月，p58-59。

低碳社会的发展启示 ——日本传统自然观的现代意义

雲南大学
文学院 漢語言文学 修士1年
王一冉

“低碳社会”，这一最早由日本学者提出的观点，日益受到世界范围的广泛关注。而在如今，“低碳社会”确实为我们提供了一个反思的视角，使我们逐步意识到：在“机械化自然论”的指引下，人类和自然是如何践行渐远，对自然的掠夺又是如何对环境和人心造成了双重冲击。

人类与自然同属于一个世界，如果说对自然的占有与破坏是人们膨胀欲望的外显，那么人们内心深处的迷茫脆弱，人们的自我封闭、各自为营或许是人们沉溺于占有自然的原因。纵然在现今物质文明极度发达的时代里，自然已经越来越居于客体的地位而与人类分化，但我们仍可以设想：解决自然问题或许可以与解决人心问题同步。且正是在思考人与自然关系以及在思考“低碳社会”发展的过程中，学者们逐渐发现了东方传统自然观在现代环境发展中的重要意义。他们将这种东方的思考方式称之为“自组织的宇宙观”，在这种宇宙观当中，人与自然不再是机械对立的，而是融合共生的。它营造了这样一种氛围：自然保持其真实原有的姿态，人在与自然相融时得到内心的充盈。而这种氛围与宇宙观都能在日本传统的自然观念中得到印证。

在日本传统的思想当中，自然无疑占据着极为重要的地位。正如大西克礼在《物哀》中所言：“日本的民族文化和民众的生活之中有一种独特的对待自然的方式，那就是人们会适应自然、顺应自然。”从太古中世时期，直到近世近代，自然感的要素一直存在于日本民族的思考模式之中。更为重要的是，在此过程当中，对于自然的敏感体察、包容共感已经成为一种重要的人格要素被确立下来。作为一个自然当中的个体，他们能感受到最明显的四季的变化，在保持真诚细腻内心的同时，将灵魂契合于变化万千的万物之中；他们观照又汇入自然，从而达到“物我同一”的境地。且如果我们站在现代的角度来看，就会发现这样的人格要素的确立是异常可贵的。因为当我们面对当今社会环境的发展，自上而下的强硬措施或许收效甚微，而每个个体对于自然发自内心的尊重、包容才是更为根本的要素。在日本，这样的要素渗透在了其传统文化艺术等多个方面中。

首先，日本传统的自然观承载在日本的歌道里。“歌对人来说是必不可少的，”在歌中，人心世情与自然都得以抒发表达。且对于日本的歌者而言，面对自然，参与者的人格精神等要素是与自然融一的。人拥有者觉察自然四季变化的敏感多情，人类的存在与自然的存在不可分割且彼此平等。正如在《古今和歌集》中所呈现的那样，一年四时自然中的种种风物被人们真诚描绘而出，在保留着自然本真状态的同时，人精神深化的层次也同自然风景一起表现了出来。“若夫春莺之啾花中，秋蝉之吟树上，虽无转折，各发歌谣。物皆有之，自然之理也。”自然与人同样拥有着兴发感动的生命力，它不是机械的、僵死的，而是同人类一样发出歌咏感叹，散发出生命的朝气。在以和歌为代表所传达出的自然感慨中，人们是发自内心地因自然而感到喜悦，因贴近自然而感到自由，因怜惜自然而感到完整。可以猜想，在此自然观的引领下，人们对于环境中万物的关照是顺应内心毫无阻力的，人爱自然就像爱惜自身，在这样的观念引领下，一种自觉包容利他的发展模式也可以毫无阻碍地建立起来。

同样，日本传统的自然观也承载于俳谐艺术当中，且得到了深化。“以天地为尊，不忘却万物、山川、草木及人伦之本情，嬉戏于落花散叶之间，并在此过程中贯穿古今之道。”自然与俳谐的宗旨息息相关，并在此基础上，对于自然的尊重进一步加深，如果说中世之前对于自然的态度还包含着许多主观的因素的话，日本俳谐中的自然就更加纯粹，人们真实地沉浸于对自然的谛观当中，将自身充分地浸润在自然里，进一步地从人们狭窄

的自我范围里跳脱出来，而去切实地体会自然万物的律动。“无像花时同夷狄，无心花时类鸟兽，出夷狄，离鸟兽，顺应造化，回归造化。”日本的俳者与自然正是达成了一种深刻的同化。从松尾芭蕉的古池跳蛙、春归鸟啼；从小林一茶竹林落雪、远山悠然；从与谢芜村的樱花逡巡、春水流荡中，可以感受到极为纯净的自然律动，人们也因此而感到深深地震撼。在俳谐中，自然变化万千，这是其活泼泼的生命的充分体现，甚至客观地向自然学习这样的态度也是俳谐不断所强调的。对自然的敬畏建立在对自然真诚的理解的基础之上，唯有如此，才可逐渐趋于人与自然融一的境地。

为了追求“低碳社会”的发展，或许日本传统的自然观能够给我们以启示。它是东方思想中的宝贵财富，从朦胧深远的歌道，到风雅之诚的俳谐，无不体现着与自然融一的人格特质，无不体现着人类与自然共有的生命力。日本传统的自然观为我们提供了这样一个契机：那就是引领我们从自我欲望这个狭小的空间中走出，从而去尊重、包容一个更加广阔的天地。同时，它或许也能为当前极为紧迫的环境问题提供重要的解决路径。

[1] 大西克礼. 日本美学三部曲[M]. 北京:北京理工大学出版社, 2020.

[2] 纪贯之. 古今和歌集 300[M]. 北京:北京联合出版公司, 2020:10.

[3] 今道友信. 东方的美学[M]. 北京:三联书店, 1991.

永井荷风《晴日木屐》中的生态美学思想浅析

武汉大学

弘毅学堂 弘毅学堂3年

白礼文

在 21 世纪的今天，生态问题越来越受到各个领域研究者们的关注。在文学领域，生态批评作为一种新的文学批评流派，被广泛应用于文学作品分析当中，为传统文学批评提供了新的视角。日本文学家永井荷风长于自然描写，然而长期以来，学界对永井荷风散文作品的研究，多聚焦于其唯美主义作家的身份，分析作品中的审美风格和审美特质¹，而鲜少关注其作品中蕴含的生态思想。本文试联系生态文学批评理论，对永井荷风散文随笔集《晴日木屐》中的生态美学观念做一简要分析。

《晴日木屐》又名《东京散策记》，记录了永井荷风在东京小巷间散步时的所见所感。在书中，荷风表达了自己对于传统低碳出行方式的喜爱与推崇。尽管明治时期电车已经很发达，荷风仍然青睐步行这种最古老和原始的出行方式，“晴日木屐”便寄托了其对于步行的情感：“一双晴日木屐不仅是突至骤雨的好搭档，即便在天朗气清的冬日，也能让自己无惧

山手一带冰消霜解后的红土地。铺着沥青的银座日本桥大街上，沟水横流，泥泞满道，穿上木屐便无所畏惧。”²

荷风之所以喜爱步行，是因为相较于电车、火车等现代化交通工具，古老的出行方式更有利于他感受自然，在路途中发现与欣赏自然之美。这正与生态美学观念不谋而合。我国生态批评研究学者王诺曾提出生态批评的三个美学原则，其中一条是“交融性原则”，即“生态的审美不是站在高处远远地观望，而是全身心地投入自然”³。封闭的现代交通工具在人与自然之间制造了隔阂，唯有步行能够让荷风毫无阻碍地投入自然之中，并欣喜于每一次对自然之美的意外发现。荷风在书中记录了自己曾与友人长途步行前往东京市内一块闲地寻找古迹“马猫冢”的经历，虽然猫冢与想象中大不相同，两人却意外发现了隐蔽的闲地之美：“我做梦也没想到，今日东京市内居然还有一片如此幽邃的森林。……每根枝条都被密不透风的绿叶压得弯下了腰。我们看到一种散发着臭味的无名寄生木，如头发般细长的树叶从大树上的瘤块与树干之间垂下。……我们两人在杂草堆中行走，任凭露水打湿衣摆，从林间一个昏暗之隅透过青叶枝干空隙，遥望远处这片宽阔的闲地。”哪怕衣物可能沾染泥土或露水，荷风与友人仍选择在森林中行走，全身心地投入、感受自然，这种与自然亲密无间的互动，和现代人与自然的疏离截然不同，是生态美学交融性原则的体现。

在推崇传统低碳出行方式的同时，永井荷风对追求速度和便捷性的新式交通工具抱有深深的忧虑，并对终日忙于逐利的现代人采取鄙夷和嘲弄的态度。他在书中写道：“一些焦急等待市内电车的人，一看到电车进站便如英勇的武士般粗暴地扒开众人飞奔而上”⁵。“武士”在这里变成了贬义词，可见荷风对于现代人因追求便利而丢失欣赏自然之心的感慨。荷风的感慨体现出其生态整体主义的审美思想。生态研究学者认为生态审美应当以生态整体主义而非传统的人类中心主义作为指导思想，以生态世界观替代工具理性世界观。⁶因此，生态美学的审美标准必然与以人为中心、以人的利益为尺度的传统美学截然不同。荷风所推崇的传统出行方式不求速度，不计较时间，在路途中以非功利的心态欣赏自然风景，而反观工业文明发达之后涌现的新型出行方式，诸如电车、铁路等远比传统出行方式更为快速和便捷，因为其目的是追求速度和效益，人们将花在路途上的时间一省再省，赶往公司或工厂，投入经济利益的生产活动。明治时期，日本资本主义经济蓬勃发展，人们在工具理性的支配下，终日忙碌于追求物质和金钱，而抛却了传统东方美学中人与自然和谐相处的诗情画意。永井荷风站在生态整体主义的视角对这一现象感到悲哀，也难怪他在书中发出“近代人所推崇的‘便利’其实最是无趣”的感慨。

除了对新式交通方式的批判，荷风还对工业文明消耗大量能源破坏生态环境表达了担忧与不满。“工厂的煤烟和电车的鸣声似乎把飞翔于日本晴空中的鹞鹰都赶走了”⁹“从深川的小名木川到猿江一带的工厂街，在工厂建筑，一排排烟囱喷向天空的煤烟，以及终日不绝的机械震动中，西洋式毫无保留的悲惨景象已然初步形成”¹⁰。上述批判都彰显了生态美学的“否定性价值”，荷风在书中不仅表达了对自然生态的赞美与欣赏，更多的是对工业文明破坏生态环境的批判与否定，亦即生态美学家伯林特所说的对“冒犯和伤害环境的批判”¹¹，这在生态美学中尤为重要。

通过上述对《晴日木屐》的简要分析，可以看出永井荷风除人们长期关注的唯美派作家、文明批评家的身份之外，更是一位具有生态审美眼光的作家，其作品亦具有生态美学的研究价值。生活在上世纪日本的荷风在书中所表达的对现代人高碳排放的出行方式、过度的能源开发破坏生态环境的忧虑，在今天的东亚乃至世界都已成为无数人共同关注的问题。以生态美学的目光，站在生态批评视角回看经典作家的文学作品，或许能为文学与生态保护领域提供新的启示。

¹张焕香：21世纪以来中国对永井荷风文学的研究综述[J]，名作欣赏，2019年第6期，第54-56页。

²[日]永井荷风著，陈德文译：晴日木屐，广州：花城出版社，2018年版，第4页。

³王诺：生态批评的美学原则[J]，南京师范大学文学院学报，2010年第2期，第18-25页。

⁴[日]永井荷风著，陈德文译：晴日木屐，广州：花城出版社，2018年版，第57-58页。

⁵张焕香：21世纪以来中国对永井荷风文学的研究综述[J]，名作欣赏，2019年第6期，第9页。

⁶转引自王诺：生态批评的美学原则[J]，南京师范大学文学院学报，2010年第2期，第18-25页。

⁷王诺：生态批评的美学原则[J]，南京师范大学文学院学报，2010年第2期，第18-25页。

⁸[日]永井荷风著，陈德文译：晴日木屐，广州：花城出版社，2018年版，第30页。

⁹[日]永井荷风著，陈德文译：晴日木屐，广州：花城出版社，2018年版，第16页。

¹⁰[日]永井荷风著，陈德文译：晴日木屐，广州：花城出版社，2018年版，第28-29页。

¹¹转引自王诺：生态批评的美学原则[J]，南京师范大学文学院学报，2010年第2期，第18-25页。

参考文献：

[1] (日)永井荷风著，陈德文译.晴日木屐[M].广州：花城出版社，2018.

[2] 蔡珊珊.从《断肠亭记》看永井荷风散文的美学品格[J].孝感学院学报,2010,30(01):59-63.

[3] 王诺.生态美学：发展、观念与对象——国外生态美学研究评述[J].长江学术,2007(02):75-78.

[4] 王诺.生态批评的美学原则[J].南京师范大学文学院学报,2010(02):18-25.

[5] 王诺.从生态视角重审西方文学[J].南京师范大学文学院学报,2006(04):119-123.

[6] 王诺.生态批评：发展与渊源[J].文艺研究,2002(03):48-55.

[7] 王园利.永井荷风作品的自然审美研究[D].陕西师范大学,2017.

[8] 曾繁仁.生态存在论美学论稿[M].长春：吉林人民出版社，2003.

[9] 张焕香.21世纪以来中国对永井荷风文学的研究综述[J].名作欣赏,2019(06):54-56.

[10] Berleant, Arnold. The Aesthetics of Environment[M]. Philadelphia: Temple University Press, 1992.

一首伟大与渺小的变奏曲：人类与自然的博弈 ——读日本科幻小说集《红雨》有感

雲南大学

文学院 比較文学与世界文学 修士 2 年

李关月

被称为日本推理小说“鬼才”的贵志祐介延续其备受中日韩读者喜爱的《黑屋》中的恐怖风格，自其经典之作《来自新世界》夺得第 29 届日本科幻大奖后，他继续以现代社会问题及人性选择为核心内容，于 2015 年开始连载反乌托邦题材的中短篇小说集《红雨》（日语名《罪人の選択》）。该小说集在今年出版后因其深刻的寓意和对人与自然等问题的多重探讨引起了国内外的巨大反响。

失控的“权杖”与被万物制约的“灵长”

人类从原始的刀耕火种开始生息，17、18 世纪伴随着启蒙主义、理性主义思潮，现代科技迅速发展。到 19 世纪，人类利用手中的“权杖”——石油，一步步打造出遍布地球的现代都市，代替上帝成为了新世界的神。

然而，这柄“权杖”并非万能。在小说中，为解决石油枯竭的问题，人类妄图通过基因工程创造出能将光合作用提升至极限的生物绿色能源藻类，为人类打开通往“美丽新世界”的大门，却意外地创造出噬主的“弗兰肯斯坦”——血泥藻。这种藻类能够入侵所有生物的细胞，并随着红雨遍布了整个地球。单一的血泥藻不会有多大的毒性，但正因红雨的存在，才能制霸全球。小说一方面可能汲取了井伏鱒二《黑雨》的些许灵感：原子弹在广岛爆炸后的当地废墟对人体有致命的辐射，但谁也没想到爆炸时的蘑菇云颗粒在千里之外所降下的黑雨竟然也能致人死命。另一方面则是对历史真实事件的思考：2001 年 7 月 25 日，印度喀拉拉邦南部连下两个月的红雨，并释放 50 吨孢子。15 年后科学家揭示了最为可能的真相——远在 6000 多公里之外的奥地利藻类孢子竟然随着大气环流产生的降雨飘落此地。

莎士比亚有言，“人是宇宙的精华，万物的灵长”。不过很多人只是看到了“灵长”，却没有看到这前面的“万物”。人并非造物主，而是万物之一，也是包括海洋在内的所有生态系统中的一员。红雨的危机，正是生态系统中生物与环境相互作用和影响的极佳案例。地球生态系统是整一的存在，牵一发而动全身。人类对自然的任何改变和干预都会像蝴蝶效应一般在未来导致深远的影响和后果。在小说《红雨》中，一枚不起眼的人工编辑的细胞为生态系统内的所有生物带来了灭顶之灾。在现实生活中，人类依仗石油的力量成为新的神明，但燃放石油时所释放的二氧化碳却成为了全球气候变暖的罪魁祸首，导致了生态系统的破坏、生物多样性的丧失等严重后果。

人类觉醒：“穹顶”和“贫民窟”对立与合作

世上没有后悔药。在人类的科技远没有达到能穿越时空改变曾经的所作所为的当下，过去的事件已经成为奠定未来发展的不可逆事实。面对已经产生的诸多问题和后果，如何亡羊补牢是最切实可行的措施和方法。而这需要每一个人的努力。“穹顶”是人类能力所到达的极限，也是与被红雨洗劫的混沌世界相隔离的“伊甸园”。“贫民窟”除了现实层面的贫困外，还有“弃民”之意。曾经，发达国家将污染转移至落后国家，以其环境为代价使得自身获得发展，这不正是“穹顶”世界对“贫民窟”世界所作之事吗？但是污染的转移并不是釜底抽薪的做法，“穹顶”对红雨的绝对排斥也仅仅是起到立竿见影的短暂效果而已。真正的拯救之路还在于共谋与合作。

《红雨》的女主人公瑞树出生贫民窟，趋利避害的本性使她抛弃了在蔽舍瓦屋的父亲，来到科技发达的穹顶进行研究。拥有两种身份的瑞树意识到，对红雨绝对排斥的“穹顶”是不可能找到红雨的克星的，因为只有贫民窟才有充足的实验素材和研究案例。这些实验素材正如使人类分辨善恶的“智慧果”一般，与红雨对抗的关键之匙等待着瑞树去寻找。于是瑞树自己成为了那条“蛇”。神圣空间可以闯入世俗空间，人类以此为基点从混沌之中创造世界；同样，世俗空间（红雨世界）的入侵也会将神圣空间“祛魅化”。在她将“贫民窟”的红雨样本带入的那一刻，“穹顶”所构筑的神圣“伊甸园”便被解构了，并转向其另一面。与之同时，瑞树也因违反禁忌而被驱逐。瑞树在科技发达的穹顶的研究终止了，但真正切之有效的研究自此拉开了序幕。

种下希望：“总有一天，这雨会变透明的”

人类是伟大的，似乎人类已经“征服”了自然。但人类也是渺小的，这种所谓“征服”在地球的生态演化系统中不过是沧海一粟般的存在，并且在此过程中产生的危机正亟待人类解决。而今，人类只能尽力延缓全球变暖的速度，努力阻止这一趋势的蔓延。《红雨》中的研究者寄希望于自然能够演化出血泥藻的天敌……尽管人类，我们，已经无法彻底改变这个不知去向何方的世界，小说依然为整个人类的未来种下了希望的种子。

无论世界变化如何，还是要保持对人类的信心。正如法国思想家帕斯卡尔在《思想录》中所言，人如苇草一般脆弱，但又因其有思想，就比致他于死命的自然更加高贵，也更加伟大。所以，小说最后还是给我们留下了美好的期待：“总有一天，这雨会变透明的”。作为读者的我也相信：从现在开始，人类的抗争和思考，点滴的作为，最终也一定会点燃未来的希望。即使希望是如此渺小，如同原野上的一点星火，如同黎明即起时的一抹微光。

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2021」

(中国語版)

二等賞作品

(中国語原文)

守卫蓝色家园

——读田岛伸二《高迪的海洋》有感

北京大学

城市与环境学院 第四纪古海洋学博士 4 年

商纪元

在日本儿童文学的世界里，田岛伸二的坐标的格外鲜明。在以精巧玲珑为风尚的日本文学里，他热衷于构建宏阔的故事空间，用大笔触勾勒自然中的童话；在以纯洁温情为主流的儿童文学中，他偏偏不忘揭露温室之外世界的残酷。《高迪的海洋》就是这样一部带有田岛个人特色的作品。

在他的笔下，大海龟高迪试图从高楼中的海洋馆中挣脱而出回到海洋，却意外发现故乡已被人类污染。在寻找生命之树的旅途中，他发现了人类的核试验基地。为了保卫海洋，他不惜牺牲生命，最终与炸弹一同化为碎片，葬身于象征自然生命的苏利耶海。这富有英雄浪漫主义的结尾，可视为人类与自然战斗的寓言。生命之树得以保存，海洋再次恢复安宁，故事在这里戛然而止，这无疑是在诗化后的圆满结局。然而柔光笼罩的收尾，同样也暗含不可预测的危机。南太平洋的炸弹并没有破碎，而是与海龟高迪一起沉入海底；海洋馆的绝大部分生物依然被困于囿圈，而捕捉行为并不随着高迪的放生而停止；南太平洋的核试验也并不会因一次失败而停止开展……光明美好结局所省略的这些问题，以“失语”的姿态再次宣告着海洋保护的严峻挑战。

对于在联合国教科文组织耕耘二十多年的作者来说， these 问题是触目惊心的。他哀叹，“今天的太平洋正置身于苦难当中。”故事书描绘了他所见的亚太海洋挑战的一隅。粘稠的油带、漂浮的塑料袋、无法繁衍的海龟、珊瑚礁上的核试验……这些无疑是人类过度开发海洋资源并进行海洋污染的凿凿铁证，又限于人类与自然的对抗。人类并非铁板一块，在故事书结尾出现的爆炸实验，不正是一部分人类为了争取军事高地进行的预演吗？战争或源于对资源的争夺，而产生这些斗争的根源不正是人类膨胀的欲望与现实资源之间的矛盾吗？

开发绿色能源、保护深海环境，这是解决海洋问题甚至全球环保问题的有效解决途径。今年6月29日，在“促进蓝色伙伴关系，共建可持续未来”为主题的世界海洋大会上，各国代表达成共识，将以深海科学研究为基础，创新合作形式，发现和保护深海典型生态。

全球联合推动的每一次对海洋的保护，都使热爱海洋的人群感到振奋，其中包括本书的作者田岛，也包括书前的我。我生长于黄海入海口山东东营。小时候，我常可以看到滚滚黄河东入海的壮阔景观，也喜欢坐在堤坝上听海浪拍打着海岸，盯着一望无垠的海面，深深陷入对海下世界的想象。就像田岛伸二所设想的海底世界一样，我也曾幻想，在海下会不会有与陆地同样充满活力的雨林，有无数奇异的海洋生物穿梭其中。

我是海的孩子，对海洋的热爱就像一枚小小的种子埋在我的心田。正因如此，我才会在触碰到田岛伸二的这本关于海洋的童话时涌起莫名的亲切感。我想，在那遥远的东洋海滨，或许也曾坐着一位海的孩子，与我一样痴迷着翻滚的白浪、深蓝的波涛，以及潜藏在海底的神奇动物。不过，与那位后来执笔走进童话世界的日本孩童不同，我选择将“海洋化学”作为自己的研究领域，如今真实地工作于深海之上。

2021年冬季，我登上“科学号”科考船，赴西太平洋进行考察。我的工作是在不同海域中采集不同深度的海水，并分析特定化学元素。这些元素是探测海域环境和指示海水运动的灵敏“示踪剂”，通过对比与分析，我们可与全球海洋科学家一起监控追踪海水的迁移、混合以及海洋地球化学循环过程。

就像海龟高迪在“回海”途中遭遇风浪与打击一样，我的出海也并非一帆风顺。我们在沿途遭遇了数次暴风雨，风浪之大可将海水拍打上舷窗。与高迪和海龟朋友们向苏利耶海的生命之树的“朝圣”类似，我与其他科学工作者也在艰难地朝着世界最深的海沟前进。在沿途过程中，我们还看到了与船只并行的海豚，或许这是海洋的使者，在护佑我们的前行。我时常在想，那深不可测的海洋之中，一定也潜藏着不计其数的生命，与海面上的我们一同驰骋于这片海王王国，高迪和他的朋友们亦在其中幸福生活繁衍。



图 1 遭遇巨浪（笔者拍摄于科学号科考船，太平洋）

出海归来后，我分析测定了自己采集的深海海水。在实验室奋战的无数个夜晚，支撑我前行的动力不仅有未知的探索欲望，同时也包括作为“海的孩子”对大海的承诺与责任。在探索与保护海洋的宏伟蓝图里，也有我的一点小小努力。



图 2 壮丽大洋（笔者拍摄于科学号科考船，太平洋）

在童话结尾，洛蒂和高迪的孩子，象征着新一代海洋生命希望的九十九只小海龟破壳而出。“洁白的月光下，海龟宝宝们悦动着新生命的旋律，迎着海浪，一起扑向大海。”这是作者期待的结局，也是所有海洋儿女所期待的现实走向。我相信，通过系统的科学研究，我们可以找到可持续的绿色能源，减缓因石油燃烧造成的环境污染。同时，我们也可以在科学数据的支撑下，采取多种渠道保护共同的海洋家园。

我愿以书中小海龟们的歌声为作结：

“蓝天属于我呀，

碧海属于我。
大地属于我呀，
自然属于我。
真正的大自然，
应该更美丽。”

参考文献

(日) 田岛伸二著、常晓宏译：《高迪的海洋》，济南：山东教育出版社，2017年。

神明寓所与自然恋歌 ——《啊！龙猫》读后感

北京大学
艺术学院 艺术史论博士1年
吴宛妮

雨声淅沥的站台、合抱不及的古木、草木幽深的“千门之森”……跟随作者的脚步，富有野趣的电影场景一幕幕展开，逐渐勾勒出那个可爱的“大愚”巨物龙猫的栖息之所。有别于大部分周边书籍，书中涉及荧幕梦境的素材几乎均由图像语言书写。这本薄薄的小册子用宫崎骏本人的手稿、随记与访谈，记录下龙猫与其住所的“原型”。正是这些吉光片羽的花草景物，最终织就了一首美丽的自然恋歌。

书中提到，宫崎骏与妻子迁居所泽时，恰逢日本经济高速发展的上世纪六十年代。与荧屏上的美丽风光不同，现实的所泽充满了人工干预的痕迹。“那时这里被开发得乱七八糟，有的田地遭到了废弃，有的地方还没修路就建起了房子，小河已经成了臭水沟。”这些场景后来启发了宫崎骏许多环保主题动画。在《龙猫》里，他温情地将这些思考裹在美丽的童话之中，以怀旧的方式，将时间拉回上世纪三十年代尚未发展的乡村。

在创作中，他会“在想象中将新建的建筑抹去”，会将朋友家的高耸大树“移植”到电影中小梅家的房子边，也会保留仍具有日本原始乡土风味的造景一如所泽的乡间小路、地藏菩萨、山脊道上布满松树的八国，以及被孩子们称为“秃山”（hageyama）的神之山武野藏。

对于这些在经济发展中幸存的自然遗存，宫崎骏格外欣喜：“当时我想，‘啊，这就是所泽的背面’。我一直以为这里会被开发，却到今天都没变。”在火山灰堆积而成的神之山中，河流蜿蜒，两边的农田中有茶树与土豆，四周则环绕着树林。这些不同的景观最终组成了龙猫的家。在荧幕中，那个世界有着神秘的自然力量，如“只有他们愿意你才能看见”的龙猫、一夜之间长得巨大的榉树、看似可怕实则可爱的煤小鬼以及驰骋于蓝天的猫巴士……与绝大多数表现乡村恋歌的文艺作品所不同的是，这些神奇风物并非被滤镜“纯化”过的想象的“自然”，而是一个兼具生与死、智与愚、光明与黑暗的更接近真实的“自然”。

在电影开端，煤小鬼藏在房屋边角，一度让小月和小梅大呼“有鬼”。然而她们的父母却并不忌讳，甚至感到惊喜。小梅一家的待“物”方式抛弃了成年人惯有的价值评价，如同孩童之眼，正是宫崎骏打量自然的方式。他并不回避自然“不讨喜”的阴暗、神秘与魅惑的一面；相反，他愿用动画语言尊重自然的本来面貌。

“杂木林里会发生很多事。不只有新生，树会倒下，会腐朽，腐朽后会长出蘑菇。这个过程既有死亡又有新生，正因如此，大自然才是那样丰富多彩。”在宫崎骏的创作中，自然并非绝对光明的“圣域”，也非工业城市的居民想象中的无忧幻境，而恰恰是一个充满未

知与黑暗的秘境。

“如果问我究竟喜欢日本的什么，植物、虫子，怎么也拔不完的杂草，儿时玩耍的、清澈的河流……我喜欢的就是这些东西组成的风景。我的心中怀有两种极端的感情，既有对日本这个国家的厌恶，又有对日本的风土与自然环境的依恋。” 厌恶与依恋，这是宫崎骏对日本自然风光的两种态度，也是人类对自然的两种深刻的情感，只有相辅相成，才共同构成了人对自然完整的认知。

电影中的龙猫，便是宫崎骏心中的自然象征。它生活在村庄周围，仿佛村庄的守护神，行动无踪、沉默不语，只站在那里就让人敬畏。影片中，龙猫带孩子们魔法让榉树苗一夜长大。这既体现了日本神道教传统中“万物有灵”的自然认知，也是无数农耕文明村庄与自然共处的寓言。在我的老家农村的坡地上，也有这样一棵需数人合抱的古树。它站在村庄与森林的分界线上，既守护着溪流与郊野，也守护着村庄的万家烟火。



图 1 电影中的龙猫



图 2 电影中的榉树与家乡老树

图 1 电影中的榉树与家乡老树

令人哀婉的是，村庄与森林的相处模式正在被改变。宫崎骏到访所泽之时，当地景观已遭破坏。无论是日本还是中国，现代工业文明正步步侵蚀原有自然景观。被大规模开采的所泽树林只是全球绿地消退的一隅。据粮农组织《2020 年全球森林资源评估》统计，全球每年毁林面积约 1000 万公顷，寻找可替代能源迫在眉睫。

面对能源问题，宫崎骏也有自己的回应方式。他常去榉树边捡垃圾，并制止砍伐行为：“我上了岁数，也该被砍掉吗？”尽管如此，他仍然时时反省自己对森林的“打扰”：“武野藏田园风光不断被破坏的时候，我自己也像个破坏者一样踏入其中。”

在“经济优先于环保”的语境下，电影所展现的世界正在离我们远去。书页上的狭山草甸、溪流与花海，若不加以保护，终将绝迹；而《龙猫》这样的自然恋歌，也将随之成为绝唱。

在书中，宫崎骏用简短的笔触记录了发生在杂木林的一个故事：“附近的小学老师曾带着孩子们来这篇杂木林里学习。他们在这里上了一年的课，还为树林唱了首歌——《谢谢你》。”可以想象，林间或许真有一只龙猫，在婆娑树影中聆听孩子们稚嫩的歌声。这些孩童中或有未来的绿色能源开发者、生态学家和森林志愿者，在不远的将来，守护着这方神明寓所，将自然恋歌永久传唱。

参考文献

(日) 宫崎骏监修《啊！龙猫》，海口：南海出版公司，2022 年 9 月

自然在呼唤

福建师范大学
生命科学学院 生物科学 2 年
龙飞越

“春，曙为最。逐渐转白的山顶，开始稍露光明，泛紫的细云轻飘其上。夏则夜，有月的时候自不待言，无月的暗夜，也有群萤交飞。若是下场雨什么的，那就更有情味了……”，千年之前，有一部日本文学经典以四季之景开篇，触动人心，成为传颂千古的

名篇。在作者清少纳言的眼中，这世界趣意盎然，日月星辰、花草树木无一不是有趣的，当我们真正开始爱自然，才会在岁序的更替中看见这些美好的东西。

这种对自然的向往和喜爱散落在各个时期、不同国家的文字中，它是千百年来人们不倦书写的对象，有着不朽的美感，人们试图用语言来描述身处自然时的审美感受和情感体验。天人合一，万物共生，这是中国人的自然观，而在日本文学家的笔下，我们也可以感受到万物有灵且美。

隐居山村的德富芦花在《春时樱，秋时叶》中记录了自己“自耕自食、晴耕雨读”的美好自然生活，绚烂多彩的富士黎明、广袤无垠的相摸滩落霞、奇诡多变的香山飞云、飘渺迷茫的花月秋夕……这些自然景象一经作者妙笔点染，令远在 21 世纪中国的读者也收获了一份拥抱自然的恬淡。

文化的徐徐和风吹拂着自然的花木鱼虫，人与自然和谐共处，从日本最古老的和歌集《万叶集》中对草木的吟咏，到松尾芭蕉、小林一茶、种田山头火等俳句大家在短小篇幅中构成的一幅幅自然画面；从高村光太郎的山居笔记《山之四季》，到谷川俊太郎在诗句中对“生命”“生活”和“人”的思考。这种与自然的对话里，不单是对“自然”的赞美，还包含了理解与敬畏，更表达着人与自然的连接。

自然给予人类美好的家园，带给了我们生命以及生命赖以生存的各种条件，曾经，人类在自然中诗意地栖居，我们随心所欲地汲取着生命所需要的养分，并塑造着自己的精神和灵魂。然而，在工业化、城市化加速进展的当下，人与自然环境的矛盾愈发凸显，大地的心跳逐渐羸弱，在向物质文明“狂飙突进”的过程中，人类不计后果地开采自然资源、破坏自然生态。

谷川俊太郎的诗句“野兽在森林消失的日子/森林寂静无语，屏住呼吸/野兽在森林消失的日子/人还在继续铺路/鱼在大海消失的日子/大海汹涌的波涛是枉然的呻吟/鱼在大海消失的日子/人还在继续修建港口”读来令人脊背发凉，当人类被欲望和利益蒙蔽了双眼，自然之美已全然抛之脑后，人类对待自然的轻慢终受报复，当南极的冰川缓缓下沉、葱郁的绿洲被黄沙掩埋、每小时就有一个物种灭绝……自然在呼唤，丧钟为我们而鸣。关爱自然，已刻不容缓。

在城市化作钢筋水泥筑起的森林，广袤的大地扬起尘埃雾霾，四季的更替不再符合规律的时候，流淌在我们血脉之中的对自然的向往不应被遗忘。自然，是高于一切人类文明的存在，大自然属于我们所有人，守护自然是我们共同的责任，人类需持一颗谦卑的敬畏之心，不断践行绿色低碳的理念。

我们的饮食、我们购买的东西、我们生活的方式，这些都是我们可以做出改变的，我们能够利用这些短暂的瞬间，在每一天的每一秒，选择帮助这颗星球。如此，万物生机勃勃，我们遂能诗意地栖居在大自然赐予我们的美好家园中，从风情万种的自然那里获得心灵的慰藉和灵魂的共鸣。

故，且共珍爱地球，创人与自然和谐共生之境。

从《百人一首》看日本文化中的自然观念

上海交通大学
教育学院 教育学修士1年
何明昭

“有鹿踏红叶，深山独自游。 呦呦鸣不止， 此刻最悲秋。”如果没有出处，我会相信这是王摩诘的诗作，不动声色地将禅意、诗意、画意相糅合，人与自然和谐相处、共伴共生，读来明净宁和。

这是《百人一首》中的一首诗歌。跨越六百余年，辑录其中最为出色的百位诗人的作品，汇合一册，篇篇动人，字字含美。有人说：《百人一首》之于日本人，恰如《唐诗三百首》之于中国人，我深以为然。书中借助诗歌语言深度演绎的自然观念，与中国古代伟大思想家、教育家孔子所主张的“子钓而不网，弋不射宿”的环保观念极为相似。而中国道教文化所强调的“天人合一”，更是朴素而纯粹的“中国古代环保观”，与《百人一首》中体现的环保观念更是如出一辙。其实，在中国最早的一部词典《尔雅·释天》中，也不乏提倡环保、重视生态保护的语句；如“春猎为搜，夏猎为苗，秋猎为柞，冬猎为狩”，春天是禽兽繁殖的季节，要控制野兽的数量，可有计划地猎取未怀孕的禽兽；夏秋两季是农作物生长、收获的季节，要猎杀对庄稼有害的禽兽，顺应秋气；冬天万物休眠，可进行围猎。这反映了古人朴素的环保观，是在保持一定的自然平衡的状态下对动物进行猎取和保护。

日本文化历来关注自然，亲近自然植物、动物的传统，而在这本诗集中，这样的倾向也同样明显。樱花被日本民族寄予了特殊的感情、感性和审美意识。在万叶时代，由于受到中国文化的影响，日本人喜欢梅、樱花、胡枝子等，在万叶集咏唱花的和歌中，有关樱花的和歌数量仅排在第八位。到了平安时代，随着日本贵族文化的成熟，樱花的地位日益上升，成为了和歌中最常见的题材。而樱花的早发早谢，也代表着王朝文化的华丽风格和佛教的无常观，而这些再平常不过的自然现象也就蒙上了哀乐伤愁的面纱。“灿灿阳光里，融融春意酣。芳心何事乱，簌簌樱花残。”感于哀乐的诗歌情愫便在这盎然的春季生发开来，落笔而成浓情字句。樱花的早发早谢引人疼惜，美的逝去总是不那么容易释怀。歌中的“芳心乱”，是樱花零乱地飘落下来，人与自然事物融为一体、不分彼此，足以说明当时人们已经将自己视为自然的一部分。

在中国历代的古典诗词中，人对自然的歌颂和赞叹也从未停止；人将自己的生命体验与时节、花草、鸟兽紧密联系，形成了延续千年“自然生命观”。《诗经·小雅》首篇就是诗歌《小雅·鹿鸣》：“呦呦鹿鸣，食野之苹，我有嘉宾，鼓瑟吹笙。”；陈子昂也有诗句“呦呦南山鹿，罹罟以媒和”，在面对类似的自然景象时，人的情感是如此相仿。而“鹿”也是《百人一首》中经常出现的咏唱对象，“有鹿踏红叶，深山独自游。 呦呦鸣不止， 此刻最悲秋”；在和歌意境里，深山的野鹿鸣叫声会让人不由地心生悲凉，充满忧愁。译文中的“呦呦”为译者增译词语，将鹿的鸣叫声用象声词汇表述出来，音律上也达到和谐。中国古诗中，出现

“鹿”的场合多与“呦呦”一词相搭配；但在二国的文化中，鹿都是美的象征。传说中的寿仙便是骑着白唇鹿现身在人间，人们认为鹿能带来吉祥、美好，大量故事传说、诗词歌赋都记载着中、日两个民族对自然的的虔诚与亲近，人们将自己的福祸命运寄希望于至高无上、神秘莫测的自然之神，向鸟兽虫鱼这些自然使者寄予了无限希望。

文化是一个民族的血脉，日本古典诗词文化中亲近自然、爱护自然、融入自然的趋向性与中国古代文化是相同的；如今我们谈论“绿水青山就是金山银山”，这也正是工业高速发展时代下古典文化的回归。

参考文献：

- [1] 小仓百人一首[M]. 外语教学与研究出版社，刘德润，2007
- [2] 论语[M]. 中华书局，陈晓芬，2016
- [3] 《尔雅》同义词考论[M]. 中华书局，王建莉，2013

日藏两《孝子传》的底本及其流传

中国人民大学
文学院 中国古典文献学博士2年
王鑫

作为中国古代民间文学的重要组成部分，孝子故事以其神秘性、地域性、表彰性的特征有助于维系大家族的内部团结，提升本地区社会成员的集体荣誉感，彰显个人的孝悌美德，从东汉开始就已在在全国范围广泛流传，并成为民间信仰与艺术创作的主要题材之一。不仅相关题材频繁见于古代祠堂、墓葬的雕刻绘画之中，孝子故事的编集也时时有之，最早或可追溯至刘向的《孝子传》。然而古《孝子传》在流传中却早已散佚，直到目前为之，国内仍未发现全本的《孝子传》，如今所能见到的传世《孝子传》文本，仅有明清学者根据类书的只言片语辑录补充的零散片段，敦煌文献中亦发现了部分完整篇章的孝子传文本，惜其不全。

所幸在东邻日本发现了两种古《孝子传》抄本，一为阳明文库本，一为船桥家藏本。阳明本的书写年代不详，正文内容写在专门印好的纸张上面，版式为黑口、左右双栏、双鱼尾，有界格，半页十行，行十五字，版心写有书名、页数，看起来与正式出版的书籍差别不大，或许是书商雇人抄写传世的版本。而船桥本无论是收录内容、人物顺序还是故事篇幅，都与阳明本比较接近，根据其结尾清原枝贤的跋语，可知其写于日本天正八年

(1580), 相当于明万历年间, 封面署名青松, 是清原枝贤儿子清原国贤的字号, 再加上正文内容写在白纸上, 正文旁边还有片假名的标注, 应该是家族内部的传抄阅读本, 至于其底本则很可能是阳明本《孝子传》。

这两种抄本的最大优点是保存完整, 虽然抄写时代或许较晚, 是唐宋中日交流愈发频繁之后的产物, 但成书于日本宽平三年(891)的《日本国见在书目录》早已著录《孝子传》, 则日藏两《孝子传》的共同底本很可能早于唐中期, 甚至保留了魏晋南北朝时期《孝子传》的样貌, 能够为我们了解古《孝子传》的具体文本内容提供一些参照。只不过相比魏晋南北朝《孝子传》动辄二三十卷的篇幅而言, 日藏两《孝子传》均只有两卷, 其中各个孝子故事的篇幅亦是长短参差不齐。若是经过有意整理编辑的本子, 应该会在行文格式、各篇篇幅、排列顺序等方面保持统一整齐。因此, 有理由怀疑这两种《孝子传》所据的底本便并非全本。

在船桥本正文之前, 有段文字提到了萧广济的《孝子传》, 其作者似乎认为这部《孝子传》节选自晋朝萧广济的《孝子传》, 但是他对船桥本所录孝子进行了两次统计, 结果都不正确, 似乎并未仔细阅读全篇, 其观点不足为凭。实际上, 船桥本与阳明本, 很可能来自于一个共同的底本。通过对比, 萧广济的《孝子传》并非两《孝子传》的底本, 唐宋类书中所引的《孝子传》与之也多有不同, 不仅有很多未收录的人物, 即使是相同的人物, 记载的事迹也所差别。两《孝子传》与敦煌本《孝子传》相比, 也有一定差异, 反倒是敦煌本《搜神记》中所收录的董永、丁兰故事与两《孝子传》较为类似, 此外, 两《孝子传》与敦煌文献的用语用字也具有很强的相似性, 因此其底本年代或许较为接近, 大体不过魏晋隋唐时期。

在敦煌本《孝子传》残存文本中, 仅舜的孝行故事便已有几种版本, 更何况敦煌文献中还有专门的《舜子变文》, 可见魏晋南北朝时期的各家《孝子传》, 应该是编者根据民间流传的孝子故事进行搜集整理, 并将其形成文字, 即便或许会借鉴其他版本的孝子传文本, 但大体上应该还是具有较大的独立性。由此看来, 船桥本与阳明本, 很可能来自于共同的民间版本, 而这个底本则是根据魏晋南北朝的各种《孝子传》残篇, 缀补整合的百衲本。

民间故事的流传, 虽然往往会发生张冠李戴的情况, 但总体上随着搜集者的不断整理, 其故事情节将会趋于定型, 并且随着时代发展, 部分其他人的孝顺行为也会逐渐归结到一个名人身上, 使其孝顺名声更具有典范性、传奇性。因此, 魏晋南北朝繁杂纷乱的孝子故事发展到唐宋写本年代之后, 便逐渐稳定为具有固定顺序、典型行为的“二十四孝”并流传至今, 期间当然还有新的孝子故事诞生, 但《孝子传》的编辑已经成为过去式, 孝行故事也进入到小说创作之中, 而非原先的历史记载等。

总而言之, 古《孝子传》或许并非散佚了, 而是随着时代发展, 被更加定型、经典的“二十四孝”, 以及更加传奇趣味的小说所继承、取代。中国的《孝子传》文本传入日本, 也对日本的民间文学产生了巨大影响, 许多《孝子传》的故事情节, 和佛教文学一起进入到日本小说的创作之中, 如《今昔物语集》中便收录了许多此类神秘的孝行故事, 在这种

加工处理和二次创作后，《孝子传》便逐渐被内化为日本民间文学的故事内容，最终塑造为日本民族的忠孝精神。

所阅图书名称：[日]幼学の会編《孝子伝注解》，汲古書院，2003年。

参考文献：

王仁俊辑《玉函山房辑佚书续编三种》，上海古籍出版社，1989年。

郑尧臣辑《邶中记·古孝子传》，《龙溪精舍丛书》，中国书店影印本，1991年。

[日]黒田彰著《孝子伝の研究》，思文閣出版，2001年。

[日]黒田彰著《孝子伝図の研究》，汲古書院，2007年。

郑振铎《中国俗文学史》，商务印书馆，2010年。

周绍良批校《敦煌变文集》，国家图书馆出版社，2017年。

[美]南恺时著《中古中国的孝子和社会秩序》，中古社会科学出版社，2021年。

《我是猫》读后感

广东外语外贸大学

日本語語言文化学院、亚非語言文化学院 日本語2年

王博灏

通过书籍的浅浅纸页，相比于去钻研那晦涩难懂的凄美，或是去体悟那幽玄的残缺美，我却认为应从平常下手，从最朴素、最简单的角度去品味日本，就如同观察邻里间的生活琐事，带着浓厚的烟火气息，这种看似“接地气”的方式也颇有一种独特的魅力。在犹如烟波浩淼的书海当中，就有这样一本情节简单，没有什么引人入胜的戏剧冲突，只是简单的叙述着生活中的点点滴滴以及主人一家和他几个朋友的生活群像。由日本作家夏目漱石创作的长篇小说《我是猫》中，夏目漱石便以一只猫的视角，全面地剖析人性与社会。

读未见书，入得良友；见已读书，如逢故人。夏目漱石如同侃侃而谈的类杂文一般的叙述，仿佛午后茶时的闲谈般娓娓道来，诙谐幽默暗含着批判与悲悯，在人类种种的可笑行为下，不禁令人去回味反思。夏目先生跟巴尔扎克很像，两人都是在现实生活中摸爬滚打着前行，也是在跌跌撞撞中感悟了人生。在写作上都喜欢通过勾画人物群像去反映社会现实，善于通过人物的举止言行揭示人物的内在灵魂。文章看似侃侃而谈，以猫的视角叙述着日本明治维新时期的社会实况，但实际上这本书却能够以客观而又完美的角度去观察日本的民族与文化内涵。文章既有对时事的评价，也有对日式美的体悟，更多的是对社会的辛辣讽刺。

我从《我是猫》这篇小说中，读出了作者见微知著，以小见大的文化特点和敢于揭露、批判、斗争的精神品格。在人物上，从小事小处上刻画人物性格；在对待生活中的点滴小事上，往往能通过一些细小的生活碎片去拼凑出社会的真相。其中最为代表的便是作者的化身以猫为代表的，以猫一般犀利的洞察力，揭露和批判了明治时期所倡导的“文明开化”中存在的各种社会问题。尖锐批判了对金钱势力和资本家等拜金主义的贪婪腐败，深刻讽刺了当时人们空虚彷徨的内心世界，从侧面反映出了当时资本主义社会的腐朽与黑暗。

我从中读懂了，日本人那勇于革新而又保守含蓄的矛盾的民族性格。在文章内容上，日本人敢于接受外来事物，敢于吸收西方的异域文化，敢于全面西化与进行现代化改革运动。但是日本文明和西方文明最大的不同，就是在假设周围环境不可动摇的前提下发展起来的。正如文中哲学家对主人所言：“如果有山阻挡，那么就考虑如何不去也能开开心心，而不是把山摧毁这就关乎如何不翻山越岭依然能够达成满足乐观的心态。”所以不论是看待人与人之间的关系，还是人与自然的关系，日本人往往都会在既有关系的基础上求得安心之道。想必是受到禅宗和佛教的影响颇大，本土文化与外来文化相互冲突交融所造就的这般矛盾性格吧。

我更从中悟到了，人应有坚守本心的毅力与敢于斗争的决心。在小说的下半部分，那个处处讥讽的猫也渐渐不再嘲讽人类，反而深切理解了人类社会的复杂与无奈。即便是自命清高的猫，和人类长时间相处之后也逐渐摆脱了猫性，变得庸俗，变得懒惰，变得老于世故。夏目漱石在小说里多次将猫和人进行对比，模糊了两者之间的界限。表面是从猫的角度去审视社会，更多的却是对人类自我的反思。在小说的结尾，面对社会的复杂，人性的黑暗，虚伪、狡诈、明争暗斗，这只洞悉一切的猫在沉沦后选择以死亡成了一种潇洒的告别。作者用这种方式仿佛向我们道来：我们又何尝不是贪杯的猫儿，看似冷眼旁观却发现自己其实亦是局中人，以为可以超越意义，以为可以看淡人生，但在黑暗的社会蹂躏下，终究还是为了本心而以死亡作为对宿命的一种抵抗。

诚然，如果社会黑暗，那么接纳现状，顺其自然是保持本心的最佳方式。但在我看来，人并不能一直像这只猫一样，对于社会现状一样因无力改变，而对炎凉的世态选择无奈与接受。相反在我看来，如果不在沉默中爆发，就在沉默中灭亡。现如今，世界格局动荡，俄罗斯深陷战火，德国在扩军，日本在搞政治暗杀，美国在闹经济危机，英国在政府辞职，法国在左右撕扯……在疫情和局部战争爆发的大背景下，经济下行，市场接近崩盘，各国之间相互猜忌，社会问题不断激化，世界各国社会中所隐藏的问题也都逐渐浮出水面。而中国和日本作为世界第二与三大经济体，自然也无法独善其身。因此，在国家和民族需要我们的时候，我们也应像夏目先生的一位好朋友所言那样，“只是向上走，不必听自暴自弃者流的话。能做事的做事，能发声的发声。有一分热，发一分光。”

“上人生的旅途罢。前途很远，也很暗。然而不要怕。不怕的人，前面才有路”。在如今，也需要我们以类似于猫的客观视角去审视世界局势乃至人类本身，理性和客观的分析世界动荡的深层原因，拒绝国与国之间的零和博弈，推动国与国之间的相互信任，人与人之间的相互关怀。最后我认为，只有维护内心的平和与正义，保持博大的胸怀，心怀敢

于斗争的精神，才能不怕黑暗，方能够为世界和平与稳定的发展，奉献自己的一份力量！¹

¹ 夏目漱石《吾輩は猫である》

通往绿色未来的荆棘之路

华东理工大学
外国語学院 日本語 2 年
李可成

所有人都发现这个夏天异于往常。先是中国长江沿线的大干旱、欧美森林的自然，再是韩国、中国东北部严重的暴雨和涝灾，各类极端天气频频发生，让数以亿记的世界人民感到惶恐不安。自然环境的安危，终于触及了每个人的心弦。

日本一直是世界公认的“环境保护模范生”，无论是精细的垃圾分类，还是国民平均卫生素质都得到了各国的一致赞赏。作为一个海洋岛国，日本有一亿多国民，人口密度为每平方公里 337 人，比印度还要高，并且还是二战中的战败国，在收拾战后残局、振兴经济的同时还要兼顾环境的保护可谓是雪上加霜。抱着这样的疑问，在漫漫书海中我找到了前环境事务次官南川秀树先生编著的《日本环境问题：改善与经验》，书中详细讲述了日本自近代化以来的环境治理之路，包括环境问题、法律、产业、国民方面的举措以及世界环保力量等内容，同时也打破了我对日本环境保护的刻板认知。

日本的环境治理并非是一蹴而就的，恰恰相反的是其直到二十世纪八十年代，环境治理才在日本得到了真正有效的实施。近代化至二战时期，日本在工业生产的同时发现了环境问题，尝试过以引进德国排烟脱硫技术等方式减少碳排放污染，但随着战争的爆发而被搁置。二战结束后，日本迫于收拾残局、整顿经济的需要，工业发展成为了排名第一的要务。伴随着超大型重化工等联合企业的形成，以四大工业区为中心，火力发电厂和石油化工厂排放的煤烟中的硫氧化物导致大气污染。企业通过大规模生产追求“规模经济”，积极进行生产设备投资，但在应对因生产造成的污染时却是消极的。随之而来的便是水俣病、痛痛病等公害病的盛行。终于在国民健康收到严重危害、市民不断的游行示威下，日本开始了大刀阔斧的环境治理，低碳与绿色能源的主题被提上日程。更为重要的是，经过四十多年的经济发展，日本已然有了建立绿色工业的资格。

首先是法律。俗话说没有规矩不成方圆，“公害”一词最早于 1896 年在日本的一份政府公文中出现，环境立法的概念初次显露。而在 1967 年《公害对策基本法》正式颁布，公害方面的法律逐渐完备，新法陆续出台，并于 3 年后成立了公害对策本部，自此日本环境法的体

系建立了起来，在往后的数十年中不断根据实际形势做出调整与更新。日本环境法体系的确立，明确了国家关于公害防止的基本立场、公害的范围以及企业负责人的责任；删除了“协调经济发展”条款，环境不再为经济让步；拓宽了地方政府的权限，赋予各级政府管理环境事务的权力，以书中的北九州市为例，在国会通过环境法后，北九州市的地方议会便有了参照物，迅速通过了北九州市《公害防止条例》，有了限制工厂的权限。面对法律，巨型企业集团也不得不重新思考能源与废料的环境问题。

而日本面临的第一环境问题就是能源问题。日本国土狭小，资源稀缺，能源净进口率近年稳居 90%以上，而在进口的能源中化石能源占比超过 86%，化石能源作为目前的世界主流能源，储量高、运输便捷、价格低，这些优点无一不吸引着日本大量进口，但也正是日本能源结构单一的问题所在，开源迫在眉睫。在日本 2050 碳中和规划中，近海风能、太阳能、地热能、核能、氢气和燃料合成氨是重点打造的新型绿色能源。经过十多年的技术锤炼，在世界范围内对绿色能源的提取和使用的方法日益成熟，发展上述绿色能源符合日本的实际国情，周边广阔海域上的强风、众多火山下所埋藏的地热，以及发达的化工业和核工业，都为日本开拓绿色能源提供了硬件支持。而使用绿色能源所形成的产业链也正好代替了旧有的进口模式，日本将以进口技术、人才和原始设备，在保证本国能源需求的同时出口新能源设备的新模式，替代传统的净能源进口模式，推动本国的低碳事业，并帮助其他发展中国家实现碳中和的目标。

对于国民和企业来说低碳绿色能源的使用也是益处多多。风电与太阳能将为普通家庭减少 30% 的电力费用负担，地热产业将为每户家庭每年减少 14000 日元的费用。企业则可以投资汽车和电池储能行业、碳回收和材料工业以及资源回收等相关行业，在实现碳中和的同时进行技术创新、产业升级，实现利润的增收。这不仅需要国民和企业的努力，政府也要参与其中，其应当为从事绿色能源、低碳生产的企业和团体提供资金、技术等补贴，书中所举的北九州生态工业园项目正是在市民、企业和政府的通力合作下所完成的绿色成就。

纵观日本的绿色之路，各种困难和阻力层出不穷，当今许多发展中国家在低碳与绿色能源的问题上屡屡受挫，很大一部分原因就是急功近利。碳中和不是一朝一夕就可以完成的，通往低碳绿色的路是一条荆棘之路，只有在本国工业基础发展完善，配以完整的法律监督体系，引进和突破绿色能源技术，在政商民的团结合作下才能顺利完成。《日本环境问题：改善与经验》向世界传授了日本在低碳与绿色能源方面的治理经验，展现了日本科学且优秀的环境治理工作，是低碳与绿色能源事业的典范。

日本人口-维基百科

能源净进口（占能源使用量的百分比） - Japan

<https://data.worldbank.org.cn/indicator/EG.IMP.CON.S.ZS?locations=JP>

日本资源能源厅资料制作图

<https://www.nippon.com/cn/japan-data/h00318/>

阅读书目：

〔日〕南川秀树：《日本环境问题：改善与经验》，社会科学文献出版社. 2017。

参考资料：

- [1] 「2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略」 - 経済産業省
- [2] グリーン成長戦略（概要） - 経済産業省

“寻花问柳”——从物哀美学中寻找绿色能源

マカオ大学
人文学院 中国語言文学1年
郭青媛

《宇津保物语》中的俊荫带着宝琴辗转流离中国与波斯，奇遇天马仙人，最终带着东方仙乐重回日本，也使丝绸之路的最东边飘洋过海延申东瀛；《源氏物语》展示的日本贵族生活中字里行间洋溢着《长恨歌》的诗愁、“遁入空门”的哲思。从传统日本文学中，我们无疑可以找到汉唐时期中国与日本文化交流的证据发现两国之间结下的深刻缘分，而日本也结合本国特点，形成文学中独特的美学符号——物哀美学。

中国古典诗歌中的融情于景或许是“物哀美学”最简洁的注脚。然而中国诗歌中既有“感时花溅泪，恨别鸟惊心”触景生悲，亦有“大江东去浪淘尽”的豪情抒怀；所谓“一方水土养一方人”，自然对文化的影响是潜移默化的，对比日本，因其国土狭小资源匮乏，在民族心理上留下自然易逝，人亦难留的烙印，这样的想法便生出“美丽总是哀愁”的独特大和民族“物哀美学”。我们可从对花、雪、月的描述中探寻这种自然之哀。

花：“人面不知何处去，桃花依旧笑春风。”樱花是日本的国花，花期短暂，但盛放时如天边绯云，凋零时如落红胜雨，便难免引人产生转瞬即逝感慨。“樱花飘落的速度是秒速五厘米”动漫《秒速五厘米》中在樱花坠落前和坠落后，虽然现实中应该只有5秒，但这其间经历的是两人越走越远的距离和进入成年社会后再也无法回看的初恋。

雪：“山回路转不见君，雪上空留马行处。”连绵无尽的雪山，满眼无尽的白色，总有连绵不尽的虚幻和徒劳感。“穿过县界长长的隧道，便是雪国。”诗一样的语言仿佛主人公岛村由词进入一个虚幻的梦境，梦里他对山峦的憧憬，看见雪花飘在驹子颈间，都暗示岛村对驹子灵与肉的爱恋是虚幻，驹子的人生和爱情是徒劳。

月：“人有悲欢离合，月有阴晴圆缺。”月亮一半晴圆，一般阴缺，本就是自相矛盾的事物。“残月辉冷，白露满地”《山月记》中的李徵，最终在自己是否是美玉的踟躅之间，在自尊心和羞耻心的挤压下忘记自己最初的样子，在同样自相矛盾的月光下化而为虎。在这样物哀文化的影响下，“自然”无疑成为了日本民族表达情感和日常生活中最重要的部分，《国民性时论》中第四条也提出“热爱草木热爱自然”这一日本国民性。对于日本传统观念

来说，人与自然必然是相互依存，和谐唯一的。

然而现实不同于文学世界般天真，人类经济社会的发展和自然的存续仿佛是天生的敌人。二战时的两颗原子弹，为广岛和长崎的自然和社会带来不可挽回的伤害，“原爆文学”兴起，控诉着《祭奠之地》降落的《黑雨》，《广岛札记》中记载着微薄的希望；二战后日本经济腾飞，但同时带来的是四大公害事件，海从生命之源变成致人水俣病的致命毒药，再找不到一片《苦海净土》；直到今日，在日本电影题材中似乎更多涉及世界的末日和人类社会的崩塌，从《日本沉没》到《哥斯拉》，人们对生态自然的担忧从未中断过。

然而我想，我们可否在文学中寻找答案？《黑雨》的最后叔父虽仍要继续照顾患病的侄女，却在看到水沟中带着水的清香味的鱼苗后重新领悟自然循环的平静。我们发现，在经济摧毁自然带来灾难后，治愈我们的依旧是自然这一剂良药。

那我想既然自然对于人的精神文化和物质生活方面都如此重要的相生相依的关系，为什么要让经济和自然成为对立面呢，二者可否共存互进？

中国正通过今日丝绸之路“一带一路”的枝蔓，向世界抛出“发展绿能”的橄榄枝。在中国广袤的国土上，风车正在西北的草原上日夜轮转，骄阳正在华北的上空化为电力照进万家，海洋正在东南的海域潮起潮落创造动能。对于与中国一衣带水的日本，如若我们能重新通过一带一路结成合作，重现百年前思路笑语欢歌，彼此取长补短互利共赢，用日本先进的技术优势的能源利用率，以及中国广阔的市场低廉的成本，共同挖掘绿色能源合作的潜能，相信最终世界会实现经济发展和自然保护的共存。

当花的坠落也能成为动力，当雪的融化也能产生电力，当月的辉光也能被吸收利用，人们对于自然的担忧和悲哀，对人生的隐隐烦忧是否也能少一些？

在这个经济腾飞的快节奏时代，当人类社会遇到难解的问题时，不妨像这样去寻寻花，问问柳，也许在不经意间，自然会给你答案。

乘绿色低碳之风，谋持续发展之路

——《日本低碳社会的政策与法律》读后感

海南大学

外国语学院日本語系 日本語4年

王程杰

近来，我时常在新闻中看到“碳中和”与“碳达峰”这两个词语。虽粗浅地知道是与绿色低碳有关的表达，但并不清楚其具体概念。于是，带着这份好奇，我在网络上查找了相关资料，由此了解到：“碳中和”即节能减排量与自身二氧化碳排放量相抵，“碳达峰”即二氧

化碳排放量的最高界点，二者合称“双碳”。同时，在查找资料的过程中，我偶然接触到日本爱媛大学兼平裕子教授所著的《日本低碳社会的政策与法律》一书，拜读后大受启发，深感其先导性理念对于制度化推进中国低碳发展之路颇具指导意义。

正如书名所示，《日本低碳社会的政策与法律》从法律层面着手，基于法律政策学、环境法学、行政法学、竞争法学、租税法等角度，探讨为了实现可持续发展的低碳社会，日本应当如何构建兼具公平与效率的法律框架这一议题。全书共六个章节，分别从应对气候变化的国际框架与各国对策、公益事业领域的竞争方式与电力行业的防止全球气候变暖对策、核能对减排温室气体的作用、碳税的发展趋势、能源来源的低碳化、构建《京都议定书》以后的框架等六个方面展开讨论。

读过全书后，印象最深刻的是兼平裕子教授就能源来源的低碳化所作的分析与构想，兼平裕子教授精准捕捉到国家在能源转型中面临的问题与痛点，在理论分析的基础上结合日本社会实际给出了具有现实参考性的意见。书中的观点为中国绿色发展之路提供了一个新的思考方向。据 2022 年《世界能源展望报告》显示，随着疫情逐渐缓和及经济较稳定复苏，世界经济进入上升通道，各国能源市场需求强劲反弹。其中，随着经济发展和人民生活水平的提高，我国能源消耗和碳排放量不断攀升，目前我国碳排放总额已占到全球的三分之一。而自 2020 年我国在联合国大会上宣布“碳达峰”“碳中和”目标后，素来以煤炭为主导能源的能源行业受到较大影响，2021 年甚至出现因对煤炭消费的控制而引发电力短缺的现象。同时面对“双碳”达标任务与国内经济发展需求，尽快发展新能源，实现能源结构低碳化转型，谋求绿色发展是当今中国亟需解决的课题。

诚然，近年来我国各行各业积极响应号召，为实现“双碳”目标做出了许多努力。如政府于 2021 年出台了《关于完整准确全面贯彻新发展理念做好碳达峰碳中和工作的意见》、《2030 年前碳达峰行动方案》等规划；企业大力研发智能家电、新能源汽车、绿色建筑；公民自发组织参加“个人碳账本”积分活动、“地球一小时”熄灯活动等等。不可否认，这些举措带来了一定的成效与改变，以 2022 年北京冬奥会为例，众所周知，它为各国选手提供了智能方便的竞技场地，为世界人民提供了一场精彩绝伦的视觉盛宴。然而，少有人知道这一世界级赛事也是一次极其成功的“双碳”减排实践。据《中国城市规划》报道，北京冬奥会 26 个场馆全部采用绿色电能供应，碳排放接近零；国家速滑馆屋面重量仅为传统屋顶的四分之一，在绿色建筑方面实现奥运历史上又一首创；清洁能源车辆占总车辆的 86%，创历届冬奥会之最。通过多项低碳减排举措，北京冬奥会约减少燃烧 12.8 万吨标准煤，减排 32 万吨二氧化碳。

然而，为了实现低碳绿色事业长足发展，在看到目前所取得成绩的同时，我们也不能忽视其中存在的问题。如对于“双碳”战略的基本概念界定不清、减排主力集中于东部发达地区、温室气体法律治理缺乏体系化以及“双碳”依托的相关环境标准缺失、政府虽已发布规划性文件，但尚未上升到法律层面，约束效力有限等。简言之，我国低碳减排事业尚处于“混乱”萌芽状态，亟需从法律层面做出规范引导。

在此背景下，兼平裕子教授所提出的构建兼顾能源政策与环境政策的复合型法规这一提

议值得我们重视。20世纪70年代，日本减碳政策处于萌芽时期，正是由于所出台《节约能源法》、《公害对策基本法》、《自然环境保全法》等法规兼顾环境治理和能源发展，二者协同作用下使得日本的二氧化碳排放增长率由1947年的30%以上下降到1979年的10%以内²。可以说，兼平裕子教授这一理念是经过实践检验的可行之策，我们有必要从中学习成功经验，基于我国现阶段国情实际，出台融合能源政策与环境政策的复合型法规，加快制度化推进我国能源结构低碳化进程，达到整体性治理效果。

最后，想和大家分享电影《流浪地球》里我最喜欢的一句台词：“起初，没有人在意这一场灾难，这不过是一场山火、一次旱灾、一个物种的灭绝、一座城市的消失，直到这场灾难和每个人息息相关。”近年全球越来越频繁的极端天气早已昭示节能减排迫在眉睫，绿色发展是人类唯一的选择。在全球命运共同体背景下，我们有必要借鉴日本等发达国家已经走过的道路，缩短试错周期，尽快从法律层面做出全局规划，谋求可持续发展道路，为世界贡献高质高效的中国方案。

¹王海晶,王亚萍.“双碳”目标愿景下我国碳排放交易市场的法律规制研究[J].社会科学动态,2022(08):34-44.

²张富利.国际视野下我国的“双碳”战略与法律治理路径[J].河南社会科学,2022,30(07):69-78.

《夜行》¹

蘇州大学
文学院 漢語言文学修士2年
李雪雯

评论的文章同被评论的故事用同一个题目，不论怎么看都是极怪异的选择，然而森见的《夜行》着实没给读者留下太多发散的空间，毕竟这本书实在太像一个总要回到原点的迷宫，正如森见先生自己在故事中所说的那样：“世界就是一场夜。”

世界是一场夜吗？

《夜行》的故事读来简单，不过就是五位十年不见的旧友相约一起参加鞍马火祭，并在居住的旅店里各讲了自身一段经历而已。倘若非要说这故事的架构有什么特别，那也不过是这些人所讲的经历都是颇具魔幻色彩的怪谈，且都牵涉到他们一位十年前失踪的朋友和一组

名为《夜行》的版画。

继承了日本固有的怪谈传统，《夜行》的怪异全不囿于烂俗的惊悚或者恐怖，而是从看似普通的日常里掀起一个个小小的角落，于是早已熟悉的物什发生改变，暴露出这样或那样的狰狞面容，而疲惫和绝望也就此攫住人心头的阴影，万物归于一场夜中。

故事的第一个单元，中井追着因冷战与自己不告而别的妻子来到尾道，却见到了与妻子样貌相似的鬼魂般的女性和浑身海腥味的酒店员工，所有的一切终结于一间暗室。

故事的第二个单元，武田和另三位友人一起结伴外出旅行，可到了最后，三人中的两位却彻底消失于夜色笼罩下的深山旅馆当中。

故事的第三个单元，藤村北上旅行，却在中途扑入了一所在大雪里疯狂燃烧的房子，因为她在那房子里看见了自己儿时的玩伴——她仍然有着小时候的样子。

故事的第四个单元，田边在搭乘一辆夜行电车的时候偶遇一个陌生且怪异的女高中生，并在与她的互动中意识到自己始终身处数年前一场没有终结的黑夜。

故事的第五个单元，分享了“经历”的五人一同走入鞍马火祭的夜晚，唯一没有讲述怪谈的大桥慢慢丢失了同伴们的身影，随后便发觉自己步入了一个陌生的世界——他亲身卷入了怪谈。

每一个故事都被夜色笼罩，每一个故事都弥漫着沉闷的气息。日常的风景在书中铺成画卷，以至于读者会错觉自己就是那个乘着夜行电车的旅客：车辆和轨道摩擦出的咣当声响在耳畔，窗外早已看到倦怠的景色不间断地朝后退去，但是突然，列车驶入了隧道。无边无际的纯黑，蔓延的夜晚，不会到来的黎明。

《夜行》的故事都由第一人称叙述，不论哪个都会给人身临其境的怪异体验，只是这种怪异并非恐怖或是恶心，而只如梅雨季节湿冷的空气般黏腻哀愁：没有人的街景，寂寞落下的雪，不停的车……熟知的事物在夜晚变了形态，本应存在的边界彻底融化，曾经可以立足的土地也变为了会吞噬自身的魔境。

阅读这样的怪谈，人很容易从心底生出冷意，即便是在蝉鸣荡漾的夏夜也会手脚冰凉。这种冰凉并非来自鬼怪，而是被故事内某种向外溢出的，贯通始末的孤独沾染，于是受到触动，感到寂寞和冷，感到自身的渺茫，感到怅然。

为什么会有如此孤独的怪谈？

一九年末的时候我去过一次京都，曾在凌晨三点时往四条河原町一代吃过夜宵。那是连草木都该入眠的时刻，可京都的街道却仍被一盏盏橙红明黄的灯点亮，二十四小时营业的店铺将整个城市照得灯火通明，以至于你会感觉自己脚下的城市分明活着，流水般的灯光是它的血管，而高速上的货车和轨道上的列车就是血液，你甚至时不时能看到改装的跑车在眼前一闪而过，但就是感不到任何“人”的存在。

那么繁华、耀眼、明亮的都市的深夜，没有任何活着的人的气息。

我在这样的夜里走进快餐店，在自助式的机器上选了食物。就在我拿到餐盘准备坐下的时候，我忽然看见这店铺里一张临街的卡座内，坐着一个西装革履，却已经沉沉入睡的人。

他穿得很正式，手边放一只公文包，面前的桌上没有任何餐食，他就那样睡在二十四小时营业的廉价快餐店内，像一只淹没在酒精深处的无脚鸟雀。

在那一个瞬间，我忽然就理解了《夜行》里那四处散逸的孤独。

日本是个建立在多灾岛屿上的国度，狭长的国土更是没有给它的居民留下太多自由的空间。不断流逝的时间长河虽然赋予了这国家亚洲第一的繁荣，却也将它本就逼仄的环境压得更为滞重，以至于生存其中的人们都像是被泡进了药酒的鸟雀，虽不至于死，却也不再能飞。

这是一种向内呈递的孤独症，是一旦出现就会在人心中不断壮大，不断吞噬其主人的黑洞，就好像森见在书中描述的那样，是一场没有尽头的，无限蔓延的黑夜。

内心深处的空洞孤独，正是孕育出怪谈的夜。

但我们是夜晚的行人。

夜行一词，在日语里读作やこう，行这一字独占两个音节，毕竟故事的重心总在终点。

故事的第五个单元，亲身步入了怪谈的大桥“迷失”到了另一个世界，在这里他见到了那个失踪于十年前的同伴，见到了这世界里伴随着欢笑与光明的另一种生活。在这里没有名为《夜行》的版画，取而代之的是一个名为《曙光》的系列，而森见真正想要讲述的内容也就此破开夜晚的魔力照耀出来，他想去描绘的，是绝无仅有的黎明。

正因为有了最深最浓的黑夜，曙光才会如此耀眼。

故事的第五个单元，大桥在奇迹的重逢后仍得回到自己心中夜行的世界，可是见证过曙光的他已被赋予了继续在夜间行路的勇气，因为夜行的夜是我们心中的夜，因为夜行是永恒的在路上，是为了绝无仅有的黎明。

¹ 森见登美彦. 夜行[M]. 单元皓，译. 北京：北京联合出版公司，2018.